

心の河

荒木 巍 著

佃書房





心

の

河

荒  
木  
山  
魏  
著



小説集心の河目次

|       |     |     |   |
|-------|-----|-----|---|
| 雨     | 雲   | ……… | 五 |
| 男の變化  | ……… | 三   |   |
| 家鴨    | ……… | 五   |   |
| 手風琴   | ……… | 五   |   |
| 葵上    | ……… | 一九  |   |
| 死について | ……… | 三七  |   |

信濃の山……………一五二

五加皮酒……………一六九

貨物列車……………一九九

老教師の苦悶……………二五五

椅子……………二五九

大きな出来事

小さな出来事……………二六九

あとがき……………三〇九

裝幀・岡鹿之助

雨

雲



菅原みちは、子供の頃から、勝気で元氣がよかつた。

村に昔、又吉と云ふ勝氣な男がゐて、どう云ふ原因からか、半鐘の吊つてある榎の頂上から飛び下りたことと、日露の沙河の會戦で真先かけて戦死をしたこととで有名だが、彼女はいつか村の子供の間で「女の又公」と言はれてゐた。

勝氣は、ともすると、人に嫌やがられるものであるが、みちの勝氣は逆に愛嬌になつてゐた。心がさつぱりしてゐたし、どこか、體付におどけたところがあつたからである。おどけたところと言つても、自分から故意におどけるのではなく、勝氣を現はした瞬間に、求める方向とは反對に足が向いてるとか、惜し氣もなくすてんと轉んでゐるとかして、ユーモラスなものが浮かぶ。また、そんな肢態に、單純で毒氣のないみちの明るい性質がよくにじみ出て、人に好感

を與へるのだ。

「又公の笑くぼは千兩ものだよッー」

彼女は笑ふと兩頬に可愛い、笑くぼがにツと現はれるが、それをいかにも愛らしげに大人がほめるのも、捉えて揶揄したり相手になつたりしたくなるやうな明るさ無邪氣さを持つてゐるからであらう。

娘になり、更に、嫁入前になつても、さう云ふ彼女は變らなかつた。ただ、色が匂ふやうに白くなり、笑くぼが益々可愛らしくなつて、人に目立つ美しさになつたが、一向自分では自分の美しさが氣付かぬらしく、さう云ふところが、又人に一層好感を抱かせた。

けれど、今は違つてゐた。毎日が、憂鬱なのである。——今と云ふのは、自分から進んで北滿の移民村に所謂大陸の花嫁となつて渡つて來、七八ヶ月ほど經つたときである。（彼女が村の娘に率先して、大陸の花嫁になつたことも、いかにも彼女らしかつたが）

良人の新之助がソ滿國境の東部に近い移民地に入植してから三年目に、結婚して來たのであるが、内地にゐる頃から彼とは知合つてゐて、氣心も解つてゐた。むつつり黙つて、右肩を稍

々聳かすやうにくいツくいツと動かす彼の歩き付きまで、みちはどう云ふものか好きだつた。

それが、今では、その歩き付きは勿論のこと、リュックサックを脊負つて、團本部の購賣組合に買ひ物に行く後姿を見てゐると、何か激しい言葉をなげつけてやりたいやうな嫌惡を覺えた。彼はむつつりしてゐるくに、妙に人が良く、自分の家の買ひ出しに行く場合、部落中を歩いて御用はないか、用たしをして來てやらうと言ふのだ。初めの頃こそ、部落の人は感謝してゐたらしいが、今では當然のことにして、彼の廻つて來るのを待つてゐると云ふ風である。

大體、この部落から團本部のあるところまでは、草原を過ぎ禿山を越えて三里もあるので、どうしても半日仕事である。入植してから三年目の、未だ建設途上にある移民村であるから、飯を食ふ時間も惜しいくらゐに忙しい。彼女は、それを考へると、苦茶々々する。のほほんと（彼女には、そんなに見える）出て行く彼の後姿を見てると、太い頸筋までが憎くなり、腹の底の方がチーンと痛むやうな感じがする。

「うんと部落のために努力して下さいよ。皆、便利だつて、よろこんでるわツ！」

彼女は堪らなくなつて、そんな皮肉を彼の後から浴びせた。

しかし、新之助はうんともすんとも言はなかつた。振返つてみないどころか、脊は低いけれど肩幅の廣いがつちりした體を、前と寸分變らぬ動かし方で、歩いて行くのだつた。

かう云ふ彼の態度を、悠々とした底力と考へてよいのか、何を言はれても返しごと一つ出來ぬ腑抜けと考へて良いのか、みちは迷はざるを得なかつた。どうも、前者とは考へられないがと言つて、後者とする、自分の見損ひを自分に見せつけることになるので、それも困つた。

しかし、彼に對する失望と前後して、この移民村の風物も生活も彼女には味氣なくて堪らなかつた。

「ねとねとした濕地と草の根つこだらけが何處が良いのかね」

みちの口からは、思はず移村民に對する非難が出た。しかし、それは非難と云ふより、自嘲の響があつた。

彼女にとつては、濕地や草ばかりが嫌やなのではない。木も石ころも、いや、それどころか部落民の顔までが嫌やだつた。

さう云ふ氣持の中で、うろうろと心を迷はしてゐるとき、彼女の手元に、兄の雄一の簡單な

葉書が舞ひ込んだのである。出張の途中、寄つてみる。新之助君によろしく。

その日は、良い天氣で、秋が深かつたけれど、小春日和のやうな暖かさだつた。良人は團本部の自動車の部分品を買ひ旁々、牡丹江まで昨日から行つてゐて、そこから雄一と乗り合はす手筈になつてゐた。彼女も驛まで出迎へようかと思つたが、山を越して七里、殊に良人がゐないので家が空になるから、行くのは止した。

随分長い間待つたが、兄達は來なかつた。良人も仲々戻らず、やつと彼が一人歸つて來たのは、夜中近かつた。豫定の列車で來ぬので、次の夜行かとそれを持つたので、こんなにおそくなつたと云ふのである。

ところが、その翌日の午後、部落境の坂道まで、出迎へるつもりで行つて、空しくわが家に戻つて來ると兄が上り框のところにて一人で仰向けになり、靴をつけたままの兩足を土間に垂らしてゐた。

「まア、兄さんツ！ 何處の道通つて來たの？」

みちの聲と一緒に、雄一はむつくり起き上つた。顔には、ふてぶてしい微笑を浮べて、

「お前達よりや、滿洲は明るいからなッ」

それは、いつもの雄一らしかった。小さいときから、脊がひよる高く、しなしなした細い體をしながら、山師根性が強く、百姓の仕事をせず、養蠶を大々的にやつたり炭屋をしたり、果ては、ほんの半年程前から滿洲に渡つて來たのだつた。無茶と云ふか太つ腹と云ふか、彼女等よりも滿洲にかけては後輩であるのに、こんな人を喰つた言ひ方をするのが、いかにも雄一らしかつたのである。

みちは、その言葉で、いかにも雄一に會つたと云ふ氣がした。そして自ら微笑が込みあげて來るのをどうすることも出来なかつた。

「相變らずね」

「何が相變らずだ」

みちはただ口をあけて笑つてゐた。嘗つては、かう云ふ人を喰つた兄の言ひ方に反撥した。勝氣な彼女はその言葉をかぶせるやうな言ひ方をしたりしたものである。それが、今は懷しくて、ただ無心に笑つてゐられるのである。

しかも、その言葉とふてぶてしい態度には、兄が本當に目の前にゐると云ふ感じと共に、彼が故郷の風物を脊負つて來てをると云ふ思ひだつた。

「兄さんが出發する頃、母ちゃんはどうだつたの赤は眼やにが止まつた」赤とは彼女の家の老犬である。

「ど、ん、ぶ、り、川、の、橋、は、出、來、上、つ、て、鋸、屋、の、啞、娘、の、赤、ん、坊、は、生、れ、た、の」役場の小使にだまされて村一軒の雜貨店の啞娘の腹が大きくなつてゐたのである。

みちは開拓初期の勞苦と異境の物佗しさで押しつぶされかかつてゐた心が、急に解放され、ふくれ上るのを感じた。そして、今まで閉ぢこめられてゐたものが、出口を見つけたやうに、一度に、何も彼も質問の矢を放ち出したのである。けれど、雄一は彼女の言葉などは相手にせず、

「よく、こんなひどい處に、お前達は生活してゐるな」

と、自分の言ひたいことは、遠慮なく言つてのけるいつもの癖で、さう言つた。

みちは、このむき出しの言葉に出會つて、瞬間、變な氣がした。普段なら、直ぐ逆襲に轉ず

る筈の、あの反撥の心がむくツと頭を擡げたのである。けれど、それはほんの刹那のことで、隠してゐたものと言ひ當てられた快感と云ふ言葉が許されるならば、むしろ、さう云ふ種類の快感を彼女は味つたのである。

「ひどいと言ふわね。兄さんには解らないのよ」

口では、そんな風に言つたが、心では兄に腹の中にあることをぶちまけてしまはうかと思つた。いや、彼が來ると知らされたとき、早く來ることを待ち望んだ氣持は、實にそれではなかつたらうか。

しかし、流石にそれは出來兼ねた。ただ、みちは良人の新之助のいかにも才氣の鈍さうなむつとりした表情や、歩くたびに肩をくきツくきツと聳かす無骨な體付を思ひ浮べて、この兄に何か才能のあふれた明るさを感じるのだつた。

「穴蟲ツ！　ほんとに、穴蟲のやうだわ。暗くて、卑屈で……」

良人のことを、心の中で囁いた。

大體、以前はこの兄に對して、彼女は餘り好感を持つてゐなかつた。彼には、何かケレンがあり、權謀けんぼうで世渡りをするところがあつた。あの傍若無人な身のこなしや言葉使ひなども、彼の本當のものではなく、相手をこけおどしたり、眞價以上に人に自分を見せるためのものやうであつた。彼が大々的に養蠶をやつたときも、巧妙に桑の代金を踏み倒したり、養蠶教師を横取りしたり、また炭屋をやつたときも、仲買人から訴へられかけたりした。そのくせ、どれもこれも失敗してゐる。そんなひどいやり方をしながら、まんまと失敗するところから見るとあの傍若無人振りはケレンと云ふより、無智な圖々しさに過ぎないとも思へる。

みちは兄をこんな風に考へてゐただけに、今の兄に對する考への變化は妙なものであつた。けれど、そんな風に變つたことすら、彼女自身氣付いてゐないやうでもあつた。

ところが、やがて、氣付かねばならぬときがやつて來た。

兄の雄一はその後三日經つても四日經つても、歸る様子はなかつた。會社の出張の途中を寄つたとあれば、日數の制限がある筈なのに、悠々と腰を落着けたその態度には、さう云ふ慌しさを感じられなかつた。尤も翌日から雨になつて、もう晩秋のために、北滿洲のこの土地では

氷の細片でも含んだやうな冷たさだつた。その上、ねつとりした底深い泥なので、道路は忽ちひどい泥濘、と云ふより泥沼に化してしまつて、驛までの團本部のトラックは止まり、歩いて行くのは更に困難だつた。そんなことのために、出發が延期されると云ふのは仕方がないが、餘りにのんびりし過ぎてゐる態度が、みちには氣になり出した。どう考へても、彼を待つ仕事のない、風來坊の姿である。

「兄さん、會社で困らない？　こんなところで引つかかつてゐるの知つてゐるの」

六日目の夕方、みちは眞面目な顔付で訊いた。けれど、雄一は仰向けにねころんで、最前からの拳闘をする手眞似をつゞけたまま（いい年をして拳闘の手眞似なぞ、いかにも田舎者らしいが）

「俺の仕事は、そんな小つぽけな仕事ぢやないよ」

と顔一つ動かさずに、言ひ放つた。

「蒙古人相手の大仕事！」

流石に、みちは彼のえばる口調を皮肉まじりに眞似て弾ね返した。

ひよる高い瘦せた體が拳闘の眞似をしてるのは、何か螳螂かまきりを思ひ出させるものがあつたので夫れを言つてやらうかと思つたが、それだけは止した。

「みちには、解らねえよ、この國家的な仕事がな。菅原君は解つてゐるらしいが」

彼は彼女の皮肉を平然として、かう言ひ返したが、聲は低かつた。

雄一の國家的な仕事と云ふのは、滿洲國の蒙古人との商賣を通して、彼等を外蒙古の蒙古人に働きかけさせ、後者をソヴェートの手から獨立させるにあると云ふのである。みちに何も解らないから、そんな會社が存在し得るものか、また、そんなことで、ソヴェートから離れさせることが出来るのか知らない。いや、それよりも、外蒙古と言ひ内蒙古と言つても、何處にあるか、どんな顔をしてゐる民族かも、まるで頭にははつきりしないのである。けれど、それを眞面目臭つてとうとうと喋りまくつてゐる姿を、じつと心持頭を下げ加減にして謹聽してゐて、時々義兄を信じてゐるやうな目をそつとあげる良人の姿とを見くらべてゐる中に、その比較の厳しさから、兄を信用しなかつた頃の心持が彼女に甦つて來た。これは、架空の大法螺であると直感したのだつた。

それと共に、法螺話を、膝に手をおくやうにして、謹聴してゐる良人が可哀さうになり、オンドム溫突の焚口から薪をつかんだままの彼女が、

「もう寝かして貰ひなさいよ」

と二度三度、暗い洋燈の下の良人に呼びかけた。しかし、新之助は、「うむ」と言ふだけで義兄が立上るまではじつと辛抱してゐた。

洋燈のほのかな光に照らされた、さう云ふ良人の横顔を見てゐる中に、みちは彼を可哀さうに思ふと共に、兄が浮調子にふらふらしてゐるに反し、足取りのしつかりした男、人生を自分の足裏で一つ一つ踏みつけて行く人間を再びはつきり見出したやうな氣がして、彼に對する信賴が湧然と湧き上つて來るのを感じた。リュクサックを脊負つて部落の用事を集めて組合に行く姿にも、何か誠實なものが考へ直された。

それに引代へ、兄の雄一は、まるで信用出來なくなつた。會つた初めの頃、どうしてあんなに好意を持ち、力強い男に思つたか、自分が訛たがひらかされてゐたのだ。そして、今では、兄は滿洲に渡つて來てこの方、職なしの放浪生活をしてゐるのではないかとまで疑ひ出した。

晴れた日が三日もつき、もう十二日目になるのに、まだ雄一は歸る氣配はなかつた。彼女は豚を追つて柵の中に入れようとしてゐたが、急に家の戸口から這入ると、

「兄さん！ あんた、一體、何の商賣してゐるのッ？」

と勝氣らしい聲を上り框で所在なげに自分の足の親指の垢をこすつてゐる雄一に浴びせた。

二三日前から薄々みちが何か言ひさうな豫感があつただけに、一層雄一には角立つて響いた。

喧嘩でも始まりさうな空氣が一瞬兩人の間に起つた。けれど、兄の目が徐ろに弱々しく下におちると、

「解つてゐるぢやねえか」

と低い聲で言つたが、何を言つたか、低すぎてみちには聞えなかつた。

その翌日、雄一は追はれるやうに、この移民村を下つて行つた。みちは見送りを止さうかと思つたが、良人の意志に従つて、彼と一緒に見送ることにした。三人は部落のはづれの坂道、

——そこら一帯、葉の落ちつくした細い楊柳の林の中で、團本部のトラックが來るのを待つてゐた。足元には葉が一面におちて腐りかけ、一種の柔い暖い匂ひを、枝の隙間から流れてゐる日

光の中にふりまいてゐた。

「あの部落にも、煉瓦の個人家屋が一軒建ちかかつてるんですよ」

良人は、いつもの落着いた穏かな調子で遙か彼方の物影を指して雄一に説明した。當移民團はまだ殆んど土煉瓦の滿人式家屋だが、將來はすべて煉瓦建になることなどを。けれど、彼女は黙つてゐた。

六里先の寒驛で、兄を見送ると、兩人は引返して來た本部のトラックが歸つた後なので、廣い草茫々たる平原をぼつりぼつりと歩いてゐた。

「もう、冬が來るな。お前には初めての冬だな」と言つてから、「辛抱してくれ」

とぼつんとつけ加へた。心の蕊がいたくなるほど深い澄んだ空の中に、一片雲が浮いてゐるところに、冬らしい影がちらと見える。

「しかし、鶏もゐるし、豚もゐる。今頃待つてるだらうよ」

とも、新之助は言つた。みちはそれらには何一つ答へなかつたが、答へる以上に、暖い心になつてること、雨雲が吹き拂はれてることを、彼は感じとつてゐた。

男  
の  
變  
化

その五年級の中に、大草雄三はゐたのである。

私は就任して五日も経たぬ中に、彼を見覺えた。一年四年五年の三學級の國漢をうけ持った關係から約五百人の生徒を相手にする。仲々顔も名も覺えられるものではない。然るに、五日も経たぬ中に覺えたと言ふのは、餘程、彼に特徴があつたと言はなければならない。

雄三はクラスでも三番目ぐらゐに大きかつたので、教室の後の壁際に席があつた。そこから東京育ちとは思へぬガツチリした肩と、四角な大きな顔の中に光つてゐる鋭い目とを見せてゐた。その日には、新米の教師に隙があつたら、それに喰下らうとする氣勢があり、その肩には喰ひ下つたら仲々離さぬぞと云ふ闘志があふれてゐた。

大體、新任の若い教師に對しては、實力をためすために生徒が質問攻めをするものである。

弱味を見せれば、そこに喰下つて、益々荒々しい態度を見せてくる。これは、何も人間社會ばかりではなく、禽獸の果てまで、新しい相手をためさうとする傾向がある。それなのだ。

私も就任するに、忽ち、この猛襲をうけた。授業なぞに皆目経験のない私は、企たくまれた妙な質問にどちをふんで周章すると、生徒はまんまと弱點を突いたことに無言の喝采をした。それを契機に、次々と彌次馬氣分の生徒が立上つて質問をし出した。

「先生、明の皇帝の名を初めから終りまで言つて下さい」

明の方孝孺の文章を講義してゐたところである。

そんなものを私が暗記してゐるわけはなかつた。私はどまついた。

「先生、御存知ないんですか」顔に一杯嘲笑をうかべて坐つた。満足らしいクク、クク笑ふ聲が、そこそこに起つた。

「先生、その天下つて字ですが、天の方が我々の足の下の場合があるんじゃないですか」又一人が立上つて訊ねた。

私は、何んのことか、見當がつかなくつた。

「そんな馬鹿なことがあるかね」

「北半球にゐたら、南半球の天は、足の下ぢやないんですか」

どつと笑聲が起つた。笑聲はしばらく續いた。そして、その間に、生徒たちの目は、かう云ふ揶揄的な質問に對して、彼がどんな態度をとるか、と、ちらちら盗み見た。

私は、問題にしなかつた。笑聲の中に苦い顔をして立つてゐた。

生徒の質問は、教師の當然知らないやうなことや智恵の廻りかねるやうな事項を用意してゐるので、仲々たちの悪いものであるけれど、考へてみれば、根が中學生であるから、バカらしい無意味なものが多かつた。

ところが、大草雄三の質問だけは、少々ちがつてゐた。

彼は雷同的な質問が終つて、一寸靜かになるやうなときを覗つてガツチリした肩を一層誇張的に兩腕と共に張つて立上るのである。彼は立上るとき、特別音を立てはしないのだが、何んとかなく級全體に彼が立上るのが解るらしく、幾つもの頭がその方を振返る。雄三は机の蓋の上に張つた兩手について立上るのだが、立上つて了ふと、悠然と上半身をそらし、片手を皮帶の

中に突込む。

級一同は、いよいよ始つたな、面白い見物だぞと云ふ意地の悪い楽しい期待を表情にそつと現すのだ。

「先生！ 僕は質問します」相手を吞んでかゝつた闘志満々たる態度である。

私は、その方を見る。そして「あの生徒」だと云ふことを知る。

雄三は、質問の實體を直ぐには言ひ出さないで、教師の態度を——嫌な顔をしたり周章<sup>あわ</sup>て出したりするのをぢつと味ひでもするかやうに、暫らく觀察してゐる。何か猛獸が生きた餌を前にして舌なめづりしながら楽しんでゐるのに似てゐる。

級の一同の者も息をのんで静まり返つてゐる。

「先生、この方孝孺<sup>タウソ</sup>の蘊<sup>タウソ</sup>窩<sup>ソ</sup>記が書かれたのは、西歐では、どう云ふ時代でせうか」意地の悪い目を側にそらしたまゝ、それが、益々底意地の悪さを思はせる視線の向け方で言つた。

「西歐？」

西歐などと云ふ言葉遣ひからして、中學生としては珍しいのである。今まで頭の悪い生徒の

下らない質問を受けてゐた私の意識では、一寸勝手がちがつたので、私は訊き返した。が、訊き返してゐる中に、私には彼が何を質問したのか解つた。そこで、

「西歐では、どう云ふ時代に當るかと言ふのかね」

「さうです。それを知りたいのです」

私には、方孝孺の生存した明時代が、西暦何年に相當するか、いや、それどころか、大ざつぱに何世紀になつてゐるのかさへ、一寸解りかねた。

けれど、知らないと言切ることは、時と場合で可能ではあるが、いつも、出来るものではない。むしろ、教師である自分の體面上からは勿論だが、それ以後の生徒の統率の上からも、大抵出来得ないものである。私は、どうしようかと、混亂した。しんとした教場の時間は、一秒二秒、三秒容赦なく経つて行く。時間が経てば経つほど、具合は悪くなるのである。私は思はず、赤くなつた。

でも、辛うじて、

「何故、そんなことを訊くのかね」と反問した。反問してゐる中に、何か手がかりを得られる

かも知れぬし、或は話頭を、轉換することが出来るかも知れないからである。これは、卑怯には相違ないが、卑怯と同時に教師としての神聖な立場を守らねばならぬ手段でもあつた。ところが、

「訊くのが、可笑しいでせうか」雄三は、自分の教師に對すると云ふよりも、恰も論敵に對するやうに、——そして、逃げようとした論敵を早くも見破つて、逃がしはせぬぞと云ふ風に鋭い目付で、烈しく反撃して來た。まるで、兩手で逃げる獲物を後から驚摑みにしかかるやうな鋭さで、そしてそれと共に上體を机の上にのしかけて、兩手をぐつと前につき出した。

「可笑しいことはないが」私は、前よりも一層辛い窮地に追ひ込まれて、浮腰のふらふらした答へ方をした。

「ぢや、悪いでせうか」

「いや、いや、可笑しいとか、悪いとか言ふんぢやないがね。何しろ、今は漢文の時間ぢやないか」

「ぢや漢文と云ふ文章を棒讀みにしてだけ居れと仰言るんですか」隙を與へず突込んでくる。

かしたり首をふつたり何かぶつぶつ呟いたりする現し方で示された。

これで、一層雄三は肩をそびやかし、辯舌を高調子にした。

「大體、中等學校の授業は、單に字句の解釋に止まると云ふのではなく、むしろ、學科のその個所のもつてゐる思想を以て、智を磨くばかりでなく、人間を作る材料とするのを眼目としてゐるやうに聞いてゐます。僕もそれが本當だと思ふんです。ところが、このタウソノ意窩記の全體の思想は僕には納得がゆかない。成程、氣節の固い人物が必要だと云ふことは解るが、昔から相變らず千篇一律なことを言つてゐるだけで、時代の人心をつかむやうな新味が少しもない。これで良いのか、私にはどうも納得がゆかないんです。そこで、西歐の事情を考へ合はせてその解決を先生に願ひしたいんです」

雄三は、私に願ひしたいと言ひながら、實は眼中に入れてもゐない風な口振りが直ぐ解るのだつた。

私は黙つてゐた。彼も返事は元々期待してゐないのだから、直ぐと、かう續けた。

「方孝孺が生きてゐたのは、西曆一千五百餘年頃です。その頃、西歐ではどんなだつたか。コ

ロムブスのアメリカ發見、ヴァスコ・ダ・ガマの印度到着、つゞいてルーテルの宗教改革、コペルニツクスの地動説、全く驚天動地の時代ではなかつたかと、私は思ふのであります」雄三は演説のやうに言葉に力をいれて言つた。そして「いや、そればかりではない。既に、ルネッサンス（文藝復興）が直ぐ背後に近づいてゐるのだッ！」と思はず、演説口調になつて、多くの聴衆を見廻すやうに、私の顔を見た。

「先生！　そこが、僕には不思議なのです。西歐では、そのやうな時代なのに、支那ばかりが相變らずのことを言つてゐる。百年一日である。いくら古を尊ぶ國だからと言つても、言説に少しの進歩もないと云ふことは、何を意味するだらう。先生、併し、實際はさうぢやなく、矢張り、進んでゐたのではないのですか。それを教へて貰ひたいんです。西歐の事情と聯關して教へて貰ひたい。そんな疑問があつては、この文章を読んだつて、感銘がなく、従つて、この本を読むことによつて、人間を作るなんて出来ないですから」

私は、それには答へなかつた。答へようにも、答へる材料がなし、又、一方、奇をてらつた問に過ぎないので、相手にする必要はないからである。

この懸窩記タツワノを書いたときは、西歐ではどう云ふ時代かと聞いて置きながら、實は何も彼も知つてゐる。教師をやつつける材料のために、相當調べてきたに相違ないのだ。

仲々、仕事はよく仕組まれてゐるけれど、よく仕組まれてゐればゐるほど、その衒學的な臭ひが私にはたまらなかつた。わざわざ、西歐を引っぱり出し、ルーテルやコペルニツクスや文藝復興まで引っぱり出して、大芝居のつもりでゐるところが堪らなく嫌だつた。

前の空虚な意味のない質問に較べると、彼のは根が生えてる感じだが、底を割つてみると下らないと云ふ點に至つては、同斷の代物である。いや、そのペダンチックの嫌らしさ愚劣さと云ふ點に立てば、私は腹が立つほど嫌ひだつた。

ただ、一般の生徒は、このペダンチックな質問をひどく、高尚な立派なものに考へて、彼を尊敬してゐるものが相當ゐるらしかつた。中學生仲間には、この種のこけおどしで充分なのである。

「矢張り、大草雄三はえらいんだな。將來の哲學者だけあつて」さう云ふ評判があつた。彼は哲學者になると稱してゐたのだ。そして、時々彼のカバンの中に哲學書が這入つてゐた。後に

なつてからの話に、彼は、辯論部の委員でもあると云ふことだつた。成程、一時熱してきたとき演説口調になつたのが思ひ起される。

中學生程度の智力と理解力、それで哲學書を讀みあさつて、その斷片的な他人の言葉の上に傲然と坐つてゐるのは、笑止千萬である。けれど、中學生時代のその向かふ見ずさ單純さは、一方からは愛すべく赦すべきものであらう。人間は、そんな風な期待を経て一人前になつて行くと考へられるであらう。併し、彼が生意氣に思へ、嫌に思へるのには變りがなかつた。

ところか、その大草雄三は、もう直ぐ卒業だと云ふその年の十二月に退學して了つた。而もそれは突然であつた。それまで、級友には地方のある高等學校に進學するのだと言つて、受験準備をしてゐたさうである。一體、何故學校を止したのだらう。彼の家は福島縣の相當大きな地主で、彼の學費などに困ることは有り得ないのだ。恐らく、哲學書の生嚙りから青年らしい煩悶に陥つたのだらう。そして、これも青年らしい一本氣と獨斷で自分を追ひつめて行つてゐる中に急に學校を止すことに決心して了つたのだらう。

彼の質問の根柢は淺はかなものだが、その執拗と果敢さには、私はひどく惱まされてゐた。

それだけに、ゐなくなると、何かほつとした。氣が樂になつたやうに思へた。だが、同時に、氣が抜けたやうになり、淋しくもあつた。

けれど、いつとはなく、私は彼のことを忘れて行つた。最早や思出しもしないほどに全く忘れて行つたのである。

私は、それから三年ほど後、支那に旅をした。もう、その頃は教師を止して文筆を事としてゐた。

私の目的は北京に在つた。塘沽<sup>タンク</sup>まで船で行つて、京奉線で北京に上つた。そこに約一ヶ月滞在してゐた。その中に、私はここまで來たのだから、足をのばして蒙古まで行つて見よう。少くとも、大同まで行つて、その石佛を見たいと云ふ念願を起したのだつた。

九月にはいつてゐたので、北京は既に涼風が榆の葉末を音立ててゐた。私は日本の内地の殘暑のきびしさをふと思ひ出した。

「蒙古はもう涼しいのを通り越してゐますよ。北京で、こんなだから」親切なツーリスト・ビ

ユーローの人は、さう言つて、冬支度を用意して行くやうにと注意してくれたのである。

私は七月の炎熱の中の東京を出てきたので、冬支度どころか、薄い夏シャツを二三枚もつてゐるきりである。買はうとしたが、店にはまだ冬の品物は出てゐず、仕方がないので、知人の二三の者に當つてみたが、獨身者の彼等に用意がある筈はなく、ただ二三枚の合のシャツとズボン下を得たきりだつた。

「こいつを重ね着すりやいい。寒いつたつてたか、が知れてるだらう。いかに蒙古とは云へ、真冬ぢやないんだから。それに、ほんの半月ほどの旅行だから」そんな風に、私は自分に言ひきかせると、それで、すつかり安心して北京の正陽門停車場を出發した。すつかり安心して云ふより、のんき者の私には氣にかからなくなつたのである。

ところが、京包線によつて、蒙疆の入口の居庸關、青龍橋附近の絶壁峻嶮を辿りながら、張家口驛に下車したときには、その寒さが想像以上であるのに驚いた。尤も、普通の状態ならばいかに蒙疆でもこれほどではないのだらう。(これは、その後、再び來たときに事實として證明された) 丁度、連日の雨降りの上に、汽車から降ろされたときは眞夜中に近い十一時過ぎで

あつた。大雨ではなく、ビシヤビシヤと降る小雨で、驛の構内も泥水だらけになつてゐる有様も、暗い驛前に申譯のやうに一本立ててある外燈にふりかかつてゐる雨の姿も、旅人である私の心の中まで冷えびえとさせて了つた。

「こりや、ひどいことになつたぞ。夏シャツの重ね着どころぢや間に合ひつこないぞ。風邪をひいて、蒙古の佗しい旅館でねつくのはやり切れないな」私は流石に心細かつた。

私には旅先で、而も、こんな異境で病氣になるのが、一番恐かつた。敗殘兵の狙撃もないことはないが、自分の旅行する行程は恐らく、そんな危険は少いだらうから、矢張り、病氣が一番恐怖の的だつた。

けれど、そのやうな恐怖を抱いたときには、すでに、風邪をひいてゐたらしい。それから三十分も出ない中に、私の脊中には悪寒が走つた。

私は心配になつたが、それでも、それ以上ひどくはならず、絶えず寒氣を感じ、涙をすゝりながらも、大同から厚和までも足をのばした。

歸りには、再び蒙疆の首府である張家口に立寄つた。實は、そこで、東京の××新聞の政治

部長高田氏と落合ふためなのである。張家口で偶然彼と會つて、共に大同まで行つたのだが、用事の関係から別々になり、高田氏は先に張家口に戻つてゐることになつてゐたからなのだ。

高田氏の旅館は驛の近くの漢人のごみごみした商店街の中にあつた。元、漢人の經營してゐた書館（女郎屋）を改造したものだと云ふ話で、成程、狭い入口を這入ると、中央に廣い石疊の廣間があり、その廣間を中心にして、小さな室が幾つも列んでゐる様子は、正に、その通りだつた。昔はその廣間には、日本の牛太郎に相當する男、やりて婆さんに相當する女がのつそりと立つたり腰かけたりしてゐて、そこに姑娘が通りかかつたり笑つて立つてゐたりしたものだらう。今は、交際室兼食堂に用ひてゐた。

高田氏は元氣のない顔をして、室に籠つてゐた。それでも、私が這入つて行くと、異郷であるだけに、ひどく嬉しさうな顔をした。十日と經つてゐないのだが、長い間待ちくたびれてゐたと云ふ表情である。

「どうしたんです。無性髭を生やして、病人じみて」

「いや、足をいためてね。大したことはないんだが。それに、かう毎日雨が降つてゐては出る

勇氣もなくなつてね」

さう言つて、泥濘でよくれた私の靴を見た。

高田氏は、大同から、張家口に戻ると、蒙疆政府の援護の下に張北から德化へと向かつた。途中、はげしい出水のために、引返したけれど、その際、トラツクの動搖のために顛倒して、足をいためたのである。

「今日、そのとき世話になつた青年が来る。もう追つつけ来るだらう」

「何んです。政府の役人ですか」

「まあ、さうだね。はつきり言ふことは、差障りがあるが。兎に角、非常に危険な仕事をしてゐる。蒙疆のために、大きく言へば東洋の新しい秩序のために捨石になる積りで、一身を投げ出してゐる」

私は前から、一國家を創建したり、大陸に正しい秩序を敷くためには、ただ表面的な政府機關だけではどうにもなるものではない。明治維新の際の、幾多無名の青年志士のやうな存在が血を流し命を的に仕事をしてゐるに相違ないと思つてゐた。然るに、今まで、一度もめぐり會

つたことのないのを不思議に思つてゐたのである。

高田氏は、その青年の職名も仕事の性質もよく知つてゐるらしいが、それ以上、私に説明することを避けた。そして、ただ、こんなことをつけ足した。

「時には、敵の部落に單身這入つて行かなけりやならん。今から二月ほど前には、やはり單身で部落に潜入すると、直接部落長を彼の家で捉へて談じ込んだ。蒙疆政府に歸順しろと言ふのだ。その部落長には前に交渉が行はれたことがある。一度は歸順の様子を見せたが、すぐ後で糸を操る者があつて、叛いて了つた。それを説服しようとしたのだ」

私の頭には、今度の旅行で見た蒙疆の荒涼たる部落の様が浮かんた。樹木は勿論なく、草が所々に生えてるきりの灰色の土の堆積である。丘があつたり、低地があつたり、そして、その低地にチヨロ／＼と汚ない水が細くうねつてゐる。さう云ふあたりに土をつみあげて造つた漢人の家が散在してゐるのだが、一體、彼等は何をして生活してゐるのであらう。

「それはひどい危険なことなのだ」高田氏は話しつづける。「敵の眞中にただ一人なんだからね。而も、使ふ支那語は、何んと言つても怪しいものだ。やつと相手が意味を判讀する程度だ

らう。支那語は相當うまいですよと自分で言つてゐるが、先方ぢや、何んと思つてゐるか。どんな言ひ違へや間違へが起るか解りやしない。言違へや間違へが、味方の中なら、それだけで済むが、敵の中ぢや直ぐ命に關係してくる。ただ一人きりの日本人を殺すのは、赤兒の手をねぢり上げるより容易だからね」

「たしかに、危険なことだ」私は風邪の涙をすゝりあげながら低い聲で呟いた。

「ところが、彼は説得して了つた。遂に、歸順の約束をさせて了つた。まだ二十を少々出たばかりの青年なんだからね。冒険小説などなら、よく出てくるだらうが、小説ぢやなく、本當にさう云ふ青年がゐるんだから驚く。そして、彼は首領と約束が出来上ると、百四五十人の部落だが、それを集めて貰つて、演説をした例の怪しい支那語でね。つまり、今日から、蒙疆政府の人民になることを部落長と約束したから、皆もその積りで、我が政府の命令に従つてくれと言ふことを。その演説をしてゐる間に、一人でも反對意見の者がゐたら、銃口を一寸彼に向ければ、それで彼の生命は消えて了つてゐたんだから、全く危険なものだ」

コツコツと靜かにドアを叩く音がした。

「ああ、來たらし」と

高田氏は目と一緒に私に云つてから、

「どうぞ」とドアの外の下に答へた。

ドアが靜かに開かれた。そして、そこに、カーキ色の國民服に長靴と云ふ扮装の青年が、靜かな微笑をたたへて立つてゐた。その微笑だけは、高田氏の他に人のゐるのに氣付くと同時に消えて了つたが。

「待つてましたよ」

高田氏は愛想の良いうれしさうな聲を出した。その聲には、その青年を愛してゐるひびき、こもつてゐた。

青年は高田氏が、さう言つてゐる間、私を氣にしてちらと見たが、何か表情にある動きがあつた。私はその表情の動きを見てとつたが、どう云ふわけで青年がそんな表情をしたのか分からなかつた。

「持つてきました」

彼はさういつて、紙袋を高田氏の手に渡してから、私の方に一二歩近寄つた。彼が心持面を赤らめてゐるのが、私に解つた。頭を下げると、

「やつぱり、先生ですね。僕、大草です。大草雄三です」と云つた。

私には突差に思ひ出せなかつた。恐らく、學校に於てなら、五年振り十年振りでも思ひ出せたらうし、いや、東京でなら、思ひ出せたらう。ところが、全く思ひがけない異郷なので、過去の記憶から遠のいてゐると見えるのである。

「東京の××中學で教へて戴いた大草雄三です」

私は思ひ出した。

「ああ、大草君ですか」

私はびつくりして相手の顔をまじまじと見た。中學時代の顔と云ふものには、丁度子供の描く繪のやうな桁はずれの調子が出てゐるが、それが、僅か三四年の中に大人つぽく整調されるものである。雄三は桁はづれも特に甚だしく、又整調も特に甚だしく、今では、顔に一種の深い落着き——と言つても、元氣の失はれた落着きを言ふのではなく、體內の人を殺しかねない

ほどの獐猛さを持つてゐながら、而も落着いてゐると云つた風の落着きが出來てゐるので、その變化のために、私には、一寸解らなかつたのだ。けれど、かうして、凝つと見てゐると、大草雄三の昔の面影は自づと浮き上つてきた。

私は自分の教へ子に對する、どこか寛<sup>ひろ</sup>やかな慈みのうるほつた感情が胸の中に湧き起つた。嘗つて、新任の自分に對して、憎々しい攻撃をつづけたことなどは、私の感情から消え去つてゐた。よし、思ひ出しても、心にひつかかつてくることはない。

「驚いたな、こんな所で會ふとは——」

私はいつか立上つて彼のところに一二歩進み寄つてゐた。そして、にこ／＼しながら、再び見直すやうに彼の上から下まで見廻した。雨の中を濡れたまゝ歩いてきたらしく、その上、長靴は入口で水洗したらしいが、それでも、ひどく汚れたに相違ない痕跡が生々しくのこつてゐた。

「僕も驚きました。ドアを開けて先生の顔を見た瞬間、餘り思ひがけないので、半信半疑、一寸目が眩むやうな氣がしました」

それから、過去を思ひ出したらしく、兵隊がするやうに兩手を體の兩側にびつたりとつけて「先生には悪いことばかりして、お詫びの言葉がありません」

とキチツと頭を下げた。私はあの頃の彼の態度を言つてゐるのだと思つたので、

「何に何に。誰だつてあることですよ。少しも氣にかけてない」と言ひながら、氣にかけない證據を見せでもするかやうに、彼の肩を親しげに軽く叩いた。

それにしても、男らしいさっぱりした禮を、——そして、その中に、本當に申譯なかつたと云ふ眞情をこめて自分にする彼の姿を見ると、あのふてぶてしい、禮に習はぬことを銜つてゐるやうな昔の大草雄三とは、随分ちがつたと云ふ氣がした。

「大草君とは知合ひだつたの？」

高田氏は先刻から兩人の應酬をにこしながら見てゐたのである。

「こりや、僕も驚いたね。實はね、今まで君のことを兩人で話合つてゐたところなんですよ」と雄三に話しかけた。

「本當に、偶然だ。君のこと高田さんから承つてゐたところなんだ。——仲々、重大な、それ

だけに危険な仕事をしてるらしいですね。併し、君には似合はしい仕事だ。君が生甲斐を感じずるに足る仕事だ。内地で、ごそごそ人に揉まれてるより、この方がどんなに似合はしいか知れない」私は言つてる中に自分の言葉に感動して了つた。そして、思はず、雄三の手を固く握つた。

「いえ」

手を私に握られた彼は、ただそれだけ低く言つて、稍々目を下におとした。

私は大草雄三とは、それだけで別れた。それきり會はなかつた。

その翌日、北京行の列車の中で、私は高田氏の話を聞いてゐた。

「大草君は、昨日も、どこか遠くから馬を走らせて來たんだ」

「それにしては、長靴が随分よごれてましたよ」

「ぢや、馬でなくて、泥濘の中を長靴で歩き廻つてゐたのかな。そのとき、そのときで夜通しでも、雨にうたれながらも歩き廻ることがあるらしいから」

然し、もうそのときには、私の雄三に對する感動は可成り落着きを見せてゐた。

大體、彼に對する感動と云ふものも、殆ど、根のない浮き上つたものに過ぎないことに氣付き出してゐた。雄三の中學時代の肩をいからした態度、その柄でもないのに、哲學書を生嚼りして、級友達に誇示した有様、悉く自分をひけらかし自分を世に衒はうとしてゐたのだが、そのやうな平凡の世界には住み得ない荒々しい性情にとつては、蒙地に於ける危険な仕事は似合はしいであらう。うまくも、自分を生かす道をみつけたものである。そして高田氏の言葉を信ずれば、巧みに、自分を生かしてゐると云ふ。そのことに對するさう云ふ種類の感動にすぎなかつたのである。その感動の底を洗つてみると、雄三の性格を信じ愛してゐるものではない、言はば註文はづれの半端物に、偶然うまい賣れ口が見つかつたのをよろこぶと云ふだけのことなのだ。高田氏の述べた、敵の部落に單身潜入して行つたことも、殊に部落長を説服してから百五十餘人の部落民を前にして怪しい支那語で演説した話に至つては、矢張り、昔そのままの雄三のひけらかし衒ふ性格の現れだけで、五割も六割も割引をして、私は面白い話として聞いたまゝでなのだ。

高田氏から聞いてゐるときには、自分は感動してゐるやうではあつたが、反省してみると、ち

やんと割引した上での感動に過ぎなかつたやうに思はれる。

私と雄三との關係は、それで切れるかと考へてゐたところ、その翌年の春、私は東京驛に彼を出迎へる運命を擔つた。最近蒙疆政府に勤めた友人のKが、内地出張で上京する大草に土産物を託したと、彼自身が私に會ひたいからと云ふので、出迎へることになつたのだ。

私は到着の十分ほど前に、ホームに行つて待つてゐた。このホームは兩方に出口があるために、車輛の番號でも打合せて置かない以上は、ともすると、會へないで了ふことがある。私は、それを氣にしてゐた。

やがて、列車は堂々たる黒い汽罐車を先頭に立てて姿を現した。

私は彼を見のがすまいと、目をあちこちに動かした。ところが雄三の首が車窓に見えた。二等の次の車輛である。私は、ほつとしながら小走りに出迎への人混みをかき分けながら、その車輛を迫つて行つた。

やがて、止つた客車の出口には人の頭がかさなり合ひ押合つて、一步でも早く出ようとお互

にもみ合つてゐた。そのために遂に早く出られず、やつと出る者は體をホームの上に弾き出されるやうに飛び出た。荷物と人とが別々に飛び出す者もあつた。

ところが、大草雄三はいつまでも出て來ない。餘り出方がおそいので、どうしたのかと私は窓からのぞき込んだ。すると、彼はまだ椅子に腰を下ろしたまま欠伸をしてゐた。

最後に出てきた彼と私は連立つて早速中央線のホームに行つた。丁度、會社の退け刻で、ここでも人々は押合ひへし合ひしてゐた。押合ふので、反つて、うまく這入れず、その人波の上に、皮鞆が高くあげられたり、帽子が飛びさうになつたりした。

「ひどい混み方だな。そんなに押合はなくつても良いのに」私は心の中で、さう思つた。ところが、その犇ひしめいてる人波を見てる中に、私は自づとその中に牽きつけられて、押し這入らうとし出した。もう、そのときには、人を押しのけてでも這入らずには損だと云ふ氣持で一杯になつてゐた。

私はやつと車内に這入つて、早くも自分の吊革と彼の分とを掴むと、それが取れたことに誇らしさを感じながら、雄三はどうしてゐたらうと窓の外を見た。すると、彼はまだ押合つてゐる

人群の背後のところに、悠然と立つてゐた。そして、押合ふ人々のもがきを無心に見てゐる。

私は先刻の列車の席の上で欠伸をしてゐた姿を思ひ合せた。どうして、こんなに、この混雑の中にのんびりしてゐられるか、鳥渡解らない氣がした。前に東京にゐたときには、同じやうに押し合つたに相違ない。では、大陸の空氣によつて、すっかり大陸的な性格になつたのか。折角、とつて置いてやつた吊革も混んできた人々のために渡さぬわけにはゆかなかつた。まだか、まだかと焦立ちながら、彼の動靜を見ると、やつと車室に這入つてはきたが、のつそりと大きな體をドアのところに寄せかけたまゝ、こちらを見ようとしなない。

私は、その様子を見てゐる中に、何とも知れず、腹が立つてきた。折角、とつて置いた吊革が無駄になつたことも、幾分手傳つてゐよう。

私は、自分の家に行くために、新市内のある停車場に降りて、百姓家の生垣沿ひの道を歩いて行つた。

「相當、大陸的になつたね」

私は先刻の不平をひそかに籠めて言つた。

「何がです？」

「悠々と最後に列車から出てきたり電車にのるときも、最後からのつたぢやないか」

「あんなに押合つたところで、仕方ありませんからね。最後から乗つたつて、ちゃんと降りることもできるし、乗ることもできるんですから」

成程、それに違ひなかつた。私は自分の押合つてゐる姿を思ひ浮かべた。そして、ひどく醜態だと感じて、急に、年下の雄三に恥づかしい氣がした。

自分だつて、押合ふのを躊躇する心がある。けれど、妙なエレキにかかつたやうに、その人波の中に牽きづり込まれて、押合ふことになる。ところが、雄三はそのエレキにかからないのである。大陸から來たばかりだからエレキにかからぬとは言へない。すでに、ここに達するまで、幾度この人波を見てきたか知れないのだから。

私は彈丸の下を長い間潜つてきたある歸還兵が同じやうな態度を持してゐたことを思ひ出した。

私は、暫らく考へてゐたが、はつと思ひ當ることがあつた。さうだと思つた。

「大草君、君は變つたね」私は感慨のこもつた、然し重々しい聲で言つた。「大陸で會つたときには、君の變化が充分に僕に呑み込めなかつたが、内地に君を置いてみると、はつきり分かつてきた」

「さうですかね。自分ぢや、相變らずだと思つてますが」

彼は私の言葉を特別問題にしてゐないやうだつた。

私は高田氏が話したある危険な仕事も、又、あの部落長と部落民を歸順させた話も嘘ではな  
いと思つた。そして、あの雨に濡れ長靴を泥濘で汚した姿も思ひ出した。

中學時代の街つた姿。だが、彼は自分の感情にまかせて退學をしてから、どんなに苦しんだか。而も、ただ苦しんだと云ふのではなく、その苦しみを立派に苦しんだに相違ないとも思つた。

「僕は汽車が下の關を出て、所謂内地の風景が變轉し出すと、何か氣持が焦々し始めました」  
彼はふとそんなことを言つた。

「矢張り、大陸がいいかね」

けれど、それに雄三は特別答へようとせず、ただ、聲を出して笑つた。

家

鴨

夜の静けさを破つて、鶴嘴を大地に打込む音がする。まるで、岩のやうに固く凍りついてる土なので、ガチンと云ふ鋭い音がする。距離が遠いので、低いが、満身の力がはいつてゐる音である。

最初、屋内にゐた連中には耳に這入らなかつた。怠屈極まる日々の生活をまぎらすため、元氣をつけて笑つたりしながら、無駄話をしてゐたからである。今日見た満人の女の話。故郷の祭の話。ぼた餅の話。

けれど、元々怠屈凌ぎの話なので、やがて、種が切れたのか、いつとなく話がなくなつた。一人が、

「寝るか。警備の交替までにや、まだ二時間あるからな」

と、暖爐の火の暖かさで痒くなつた體に手を突込んだ。

「木曾の御嶽山は、なんぢやらほい、

……

もう一人が、唄になりそうになつた瞬間、

「おい、待て」

と、前からじつと聞耳を立ててゐた一人が手で制した。

「何んだ、あの音は？」

ウム？ と誰かが、低く問ひ返したやうであるが、それきり一同はしんとなつた。

宿舎は、リヤンザン糧棧（滿洲の雜穀店の倉庫。日本の倉の七倍も八倍もあるもの）を急に改造した建

物で、壁が厚いせいもあるし、又、前述の如く、少々はなれてるせいもあつて、音は低い。だが、成程、皆の耳に響いてきたのだつた。

「匪賊の奴が、何かしてゐるんぢやねえか」

突拍子もないことを言ふ者があつた。けれど、その場合、誰も嘲笑する者はない。と云ふのは、この第一次武装移民團が、昭和七年十月十四日の夜、佳木斯の港に着くや否や、匪賊に襲はれた。長い旅をして、哈爾濱から松花江を流れ下り、相當うんざりして、いざ上陸と云ふ途端、匪襲が起つた。而も、それから毎日々々匪賊騒ぎなのだ。三十日経ち、六十日経つても、目的の移民地に行ける望みはない。今日の開拓地の治安とは全く違つて、當時は滿洲國の創建未だ日が浅く、地方は流賊の跳梁に委せられてゐる状態であつて、彼等は五百七百、或ひは千二千の集團をなして暴威を逞しうしてゐた。武装移民團は名の如く、武装で身を固めてゐた。大體、平和な静かな土地に移民するのではなく、以上のやうな事情を略々知つてゐて、大和民族の發展と滿洲國の基礎を固めるために一身を抛つ覺悟の彼等なのだ。従つて、戰鬥に耐えられる在郷軍人中から選拔されたのである。それにしても、餘りにも匪賊騒ぎが多過ぎた。元來が農業移民でありながら、農業については小指の先ほどもなされず、来る日も来る日も匪襲に對する警備である。當時、駐屯してゐた關東軍と滿洲軍とを助けて、この佳木斯ジャムスの街の警戒に當つてゐたのである。

そんなわけで、一寸した物音にも、直ぐ匪賊のことが彼等の頭に浮ぶ。併し、彼等の一人が氣づいたらしく、

「まさか、匪賊ぢやあるまい。この警戒の嚴重な中を容易に潜つて來られるものぢやねえし、第一、奴等が何か惡戯をする積りなら、あんな人に聞えるやうな音は立てねえよ」

たしかに、それに違ひなかつた。それに違ひなかつたと云ふより、恐らく前から解りきつてゐる筈のことだ。

けれど、それが、やつと今に至つて頭に浮んでくると云ふことは、——又、馬鹿々々しいぢやないか、そんなことがある筈がないと云ふ風にその男も笑ひ出さないし、聞いた者もさうだ馬鹿々々しい想像だつたと笑ひ合ひもしないで、眞剣な表情をくずさなかつたのは、矢張り、當時の嶮しく物々しい空氣を物語つてゐるのである。

一人が立上つて行つた。表の戸を細目にあけて、そこから見るためである。

すると、又一人が、直ぐ後から立上つて行つた。

兩人は折重なつて、外を見てゐる。

「見えるか」

上體だけ、その方に振り向けてゐる残りの一人が、ある手付をして聲をかけた。

「ヒュン！ と、鼻をとられるなよ」

ヒュンと唸つてとんでくる匪賊の彈丸で、鼻をうたれるぞと云ふ意味を、顔を戸の隙間から出しでる男に言つたのである。言ひ方がおどけてゐると、言つた男がいつも道化てみせる人間なので、流石に、皆はにやつと笑ひ出した。

「何も見えやしねえ、月も星もねえからな」

そう言つて、戸口から顔を振り向けた。

「何んでもねえさ」匪賊ちやあるまいと言つた木下である。

もう、そのときには、例の道化けることの好きな都築が戸口の二人を搔き分けるやうにして外に出て行つた。彼は百姓には珍らしく、機敏な男でもあつたのだ。

成程、眞闇だつた。月や星がないばかりでなく、雪もよひの雲がのしかかつてきてゐるのに相違なかつた。

都築が腰をかがめて、前方をすかし見ながら進んで行く二間ほど後から、戸口の二人が同じ恰好でついて行く。暖爐の周りにのこつてゐた者は、或ひは戸口に重り合つたり、腰掛に用ひてる石油罐から立上つたりした。依然、火にあたつてゐるのは木下一人きりなのだ。

やがて、前方に進んで行つた都築が立止まり、何かすかして見てゐる様子だつたが、

「おお！ 北口！ おめえか」

と叫ぶ聲がした。驚きと安堵との混り合つた高い聲である。

見れば、一人の男がづつしりと重い防寒着の前のボタンをはづして、働き易いやうにし、大地めがけて鶴嘴を振下してゐる。

地下三尺ほども凍結してゐる土は、全く岩石以上に固く、その鶴嘴の切尖が叩きつく毎に、ぐんと反動をその男の握つた手に伝えると共に、凸凹に尖つた土塊が火花のやうに飛び散る。

都築とその男と顔が合つたのは、その男が鶴嘴を打込んでから、身を屈めて、金塊でも拾ひ上げたやうに、なぜさすり、暗闇の中でためつすがめつしてから「うむ」と低い聲を出して、顔を上げたときであつた。

目鼻立がはつきり見えただけではないが、長い間起居を共にしてゐるので、體の恰好、顔の輪廓、全體の感じから、都築には北口喜太次と解つたわけである。

けれど、都築は、それについて、驚きと不安とを混ぜた表情で、黙つて了つた。

「一體、おめえは……」

一體、何をしてるんだと云ふ言葉を半分だけ言つたまま、流石敏捷な都築にも、彼のしてることが解らぬらしく、ぼんやり突立つたままになつた。

そこへ、後の二人が駈けつけた。

「北口君か、何してるんだね！」

二人は、無作法に大聲で訊ねた。

けれど、北口は黙つてゐた。黙つて、手にもつた土塊を、厚い手袋を通して汗がにじむほど強く握りしめた。それから、それを嗅がうとするやうに、鼻先に持つて行つた。いかにも尊いものを扱ふやうであり、愛するものを遇するやうであつた。

その姿を見てゐる中に、都築には、日頃口もあまりきかないやうな穏和しい北口喜太次が何

をしてゐるかが、解つてきた。都築源八の頭どころでなく、心臓にも、いや、全身に稻妻のやうに駈け廻るものがあつた。強い強い感動である。而も、百姓同志でなくては解らぬ感動なのである。

續いて、後の二人にも解つた。

「おお、解つたよ。喜太次」

と思はず大聲で、都築源八は叫んだ。

北口喜太次は、それより少し前に、自分の身邊に突然三人の男が現れたのに膽をつぶしてゐた。それまでは、夢中になつて、氣付かないでゐたのである。何か自分の悪い所業でも見付かつたもののやうに、都築から聲をかけられると、一步後に退つたほどである。

暫らく、四人の者は、まるで凍つたかのやうに黙つてゐた。もうそのときには後の二人にも解つてゐたのだ。そして、それきりであつた。ただの一言も言葉を交そうとせず、黙つて、頭をたれたまま、四人は宿舍の方に歸つて行つた。

一體、北口は何をしてゐたと言ふのだらう。そして、彼等三人に何が解つたのであらう。百

姓にだけ解る感動とは何んであるのか。

2

やがて、暖爐の側に、皆が次の交替まで寝そべつてゐた。大抵、勤務の疲勞で、うとうとと眠入つてゐる。ただ、都築と北口だけは隣合せに體を横へてゐるが、何か目が冴え反つてゐた。何か鋭く考へてゐる目である。

長い間、さうして黙つてゐた。何處か遠くの方で銃聲が四五發した。恐らく、街の中に入り込んだ匪賊でも見つけての發砲か、逆に、狙撃されたかであらうか。遠い音では、麻痺してる兩人には殆んど何んの感じも起させなかつた。

又しんとなつた。

「おめえに、とうとう見つかつたな」突然低い聲で、喜太次は話しかけた。隊中でも親しい間柄なのである。ところが、道化者の都築は、妙に考へ込んで、ただ少し頭をその方に動かした

きりだつた。いつも、相手の言葉を聞くや否や、それを茶化したりと、ぼけて見せたりする彼としては、珍しいことである。

「都築！」喜太次はそれには關はず、低い聲でつぶけた。「俺は、今日と云ふ今日は、土を見たり土を握つたり土を嗅いだりしたくて堪らなくなつたんだよ。今まで長いこと耐えに耐えてきたんだが、とうとう耐えきれなくなつた」何か濟まないことでもしたやうな聲である。「晝間、力一杯に土を掘つて、明るい暑の光で見たり嗅いだりしたかつたけど、皆が苦しい警備をしてるかと思ふと、それができねえんで、そつと、暗闇の中でやつた。俺ア見つかつて、驚いた。皆氣を悪くしてやしねえかな」

「喜太次！ おめえ、恥かしいことでもしたと思つてんのか」都築源八は、いつになく泣いてるやうな聲だつた。

「かくれてやつて、濟まねえと思つてるだ」

「濟まねえことも何もねえ。——おめえの心はよく解つてる。いや、おめえの心は、同じく俺の心でもあるんだから、解り過ぎるほど、よく解るんだよ。俺達が滿洲に渡つてきたのは、他

でもねえ、百姓がしたかつたからだ。内地の猫の額ほどの小さな土地を争ひ合ふのぢやなく、  
大手を擴げて胸一杯深呼吸ができるやうな、——大聲を出したら、どこまでも聲が飛んで行く  
やうな、滿洲の廣い廣い土の上で百姓がしたかつたからだ。ところがどうだつた。五十日經ち  
六十日經ち七十日經つても、俺達には百姓をする目當<sup>めあて</sup>すら立たねえ。來る日も來る日もそれ匪  
賊ぢや、それ警備ぢやねえか。勿論、滿洲に渡つて國家の御奉公をする積りだから、匪賊なん  
ぞ覺悟の前だ。併し、土を掘りながら、一方警備つて言ふなら話は解るけれど、百姓できる目  
當すらはつきりしねえんだからな。何んでも噂ぢや、入植する土地すら定つてゐねつてことだ  
よ」

「それは、俺も聞いた」

「これぢや、酒をのんで暴れたり、半狂人のやうなことしたくなる。おめえのやうなおとなし  
い男にや、そんな無茶なことはできねえが。——おめえが、そつと土を掘らずにゐられねえ氣  
持はよく解るだよ。俺ア、さつき、おめえが掘つてるところ見たときにや、泣きてえのか嬉しい  
のか狂ひさうなのか、何んとも言へねえ氣持になつた」

兩人は再び強い感動が來たらしく、それきり黙つて了つた。

暫くして、

「けど、權ちやんや蓮池君は氣を悪くしたでねえか」

「あんとき、何も口利かなかつたからか？ 違ふだ。權ちやん達も同じ氣持だつたから、思ひ當つて、口が利けなくなつたんだよ。それにしても、岩見てえな土ぢや、さわつて見たつて土質が解るめえ。第一、土みてえな氣がしめえ」と凍つた土のことを言つた。

「んだ。だから、俺ア、一塊ひとかけ持つてきただ。こいつ抱いて寝たら、明日の朝にや融けて土になつてゐべえと思つてな」

融けたら泥水みたいになるだらうと思つたが、源八は黙つてゐた。喜太次の氣持に感動して、黙つてゐた。

丁度、そのとき、嚙んで吐き出すやうな聲で、

「煩せえな！ つまんねえ話は止せ！」

それは、例の木下の聲だつた。眠つてゐなかつたらしいのである。

源八は、常に人を見下してるやうな冷たい木下惣市にむかつと腹が立つた。百姓としての土に對する純粹な感動をしてゐるときだつたので、一層腹が立つたが、矢張り、その感動を殺すまいとして、怒を爆發させることを止した。

——なんて云ふ野郎だ！ 百姓の心が一寸もねえぢやねえか！

ところが、その翌日の曉方、空になつて北口喜太次の夜具の間から新聞紙の包をそつと取出して、表の戸の隙間のところに跳んで行つた男がゐた。喜太次は、交替で警備に出た後なのである。

その男は、隙間から漏れる曉の淡い光を、紙包の中の物にあてて、じつと見入つてゐた。

その包の中の物は、昨夜の話の土の塊であることは勿論だが、驚くことには、その男は木下惣市だつた。

この佳木斯の籠城は翌年の二月の初旬までつゞいた。第一次武装移民團の「佳木斯の冬營」と言つて、有名なものである。

團員達は、この冬營にはほとほと參つた。豪氣な魂をもつた農民達であるが、流石に神經衰弱氣味になつた。ある者は酒でまぎらし、ある者は喧嘩早くなつた。それが極端になつて、ある者は些細なことから相手に發砲する事件を起した。

そう云ふ空氣の中に、ある日、一羽の家鴨が現れた。

家鴨は、最初は宿舍の軒下のふせた籠の中に、上から雪よけのアンペラを被されて飼はれたが、間もなく、野良犬にも黒猫にも危害を加へられることがないと解つて庭先に解放された。晴れた日には凍つて黒く汚れた雪の上を、例のよたよたした腰付で歩いてゐた。毛皮を背負つたり、擦切れたボロ外套を着たりしてゐる一見山賊のやうな團員を恐がりもしなかつたし、耳の立つた尻尾の丸くまいた滿洲犬が側をのそのそ歩いて行つても平氣だつた。相變らず、よたたと歩いた。

他所の宿舍の團員でも、それに氣付くと、立ちどまつて暫らく見ており、やがて、にこにこ

微笑した。隊長の市川中佐も、何氣なく通りかかつて、よたよたした彼女の體を踏みつぶしうになつてから氣がつき、それから暫らくじつと見てゐた。そして、同じやうににこにこと始めた。

「よく見とると女のやうぢやな。歩き方が尻の重い女に似ると言ふんぢやない。女のやうな優しさを持つとるからぢや。——誰が飼つとるのかね」

丁度、そのときには、飼主を知つてゐる者がなかつたので、誰も中佐に答へなかつたが、實は飼主は北口喜太次であつた。

一體、彼はどこから手に入れたものか。恐らく滿人からに違ひないが、どんな風にして彼等が持つてゐるのを發見したか。（その頃、滿人は強奪されるのを恐れて、豚や家鴨の類に至るまでかくしてゐた）そして、又、どうして自分の物にしたものか。買ったか、奪つたか。彼のことでだから、奪ふ筈がない。では、金のない筈の彼が、どんな風に買ったのであらう。

お道化<sup>どけ</sup>者の都築が、

「隊長も仲々隅に置けんよ、家鴨は女のやうぢやと。喜太次の心底をよく見貫いてる」

とある目附をして、北口を調弄からかふ。すると、そんな心を起したことの無い彼は、まんまと調弄に乗つて、

「お、おれは、そん、そんな……」

と周章てて、辯解しやうと吃る。

「ならぬ、ならぬ」めつと子供のやる睨み方をして、

「娘を、今夜は俺がかして貰ふぞ」

と一層調弄ふのだつた。

だが、木下となると、肉の厚い大きな掌で、もがく家鴨をぐつと掴んで、

「いい肉附だ。これなら、うまいだらう」と大きな目附をぎよろつかせる。

今までお道化てゐた都築は、その木下の大きな掌と、掌の掴み方と、ぎよろりとさせた目附とを見ると、思はず、ひやりとする。彼なら、人目を盗んで殺して喰ひかねないと思ふのだ。

「木下さん、どうか、後生だから……」

堪りかねて、北口喜太次は手を合せる恰好をした。

「はは……。手を合せるのは止せ。喰ひたくなつたら、喰ふよ」

北口は、その後、木下が氣にかかつて仕方なかつた。夜、都築と一緒に警備についたとき、いかにも重大さうな低い聲と眞剣な表情とで、

「俺、おめえに聞きてえことが一つあるんだよ」

と彼につめよつた。

「何んだい？」

都築は、餘り眞剣な喜太次の表情なので、少々薄氣味悪くなつた。

「ぢや、話すよ。——あの木下だね。木下は家鴨を本當に喰ふ氣かな。どうだな。正直に、正直に言つてくれ」

「何んだい！」思はず、そんな言葉が出た。餘り相手が眞剣なのでこちらまで眞剣にされた、その反動で、

「俺だつて喰ふかも知れないぞ。うまそうだからな」  
と戲談にしてつた。

「えッ！ おめえも！」

戲談を戲談にとらず、喜太次は泣き出しそうな顔になつた。

都築源八は、この瞬間の北口喜太次の泣き出しそうな表情が、いつまでも記憶にのこつた。それから、二三日経つた頃、家鴨を水なしで飼つて置くのは可愛そうだと誰かが彼に話すと早速、その夕方、警備で疲れた體で、水を汲み、而も、水ではこの眞冬、家鴨が可哀そうだと湯にわかして、それを大きな甕かめに入れ、家鴨をそれに浮かした。

彼は稍々口をあけて、首をカメの縁にのせ、湯水をはねかす家鴨を、いかにも可愛げにうつとり見つゞけた。その顔を、都築源八は見たとき、二三日前のあの泣き出しそうな顔を想ひ出すと共に、きゅツと胸に痛みを感じた。——どうして、あんな人の好い彼に、惡質の笑談を言つたのであらう。この家鴨こそ、彼のただ一つの慰めであるのに。鉄も鎌も握れぬ百姓としての辛さを慰める唯一つの吐口であるのにと。

たしかに、北口喜太次にとつては、唯一の慰めだつたのである。

その渴き求めた入植地に這入る日がやつと來ることになつた。國を出て以來、一日として、

——又夢の中でも忘れられなかつた大陸に農耕を營む日が來たのである。

一時は入植地がないのだと云ふ噂の飛んだ夫れも、一月ほど前の實地踏査によつて決定を見た。そして、いよいよ、二月十一日、紀元の佳節を卜して、一個中隊だけが先遣隊として出發することになつたのである。

この一個中隊は、武裝移民團の全體四個中隊の中から選抜した混成中隊で、約百八十人ほどである。これは、出發の前々日の朝發表になつた。ところが、前から之に加はることを激しく望んでゐた北口喜太次は選から漏れてゐた。

朝飯を喰べてから、都築源八が用を足すために宿舍の横の土塀のところに行くと、喜太次が小用を足してゐた。源八は親しい氣持から、並んで立つた。そして、彼の方を見るでもなく、

何げなしに、

「おめえは運の良い男だ。また、落ちたな」

と擲<sup>から</sup>擲<sup>か</sup>つた。無口の方なので、誰とも軽く話をしないが、源八にはいつでも、直ぐ應じてくる筈なのが、今は固く黙りこくつてゐる。

源八は氣付いて、彼の方を見た。丁度、用がすんで立ち去りかかつてゐる。

「怒つてゐるのか」

けれど、これにもまるで、喜太次は應じようとしなない。ぷんとした固い表情のまま、彼に一顧も與へずに去つて行つた。

流石に、源八はにやにやした笑ひを引込め、首だけその方に振つて後姿をじつと見送つた。用を終へてからも、暫らく、そこに立つてゐたが、

「あいつ、家鴨をひねり殺しやしねえかな。ひどく深刻になつてきたから」  
と獨語<sup>ひとりごと</sup>を漏らした。

源八の今の言葉——家鴨については、次のやうなことがあつた。それを少し説明して置きた

い。今から一月前の例の實地踏査のときであつた。喜太次はその際も、参加を熱望してゐたが矢張り選に漏れたのである。彼は勢込んでゐただけに、落膽して茫然とした。

源八は彼のその顔を見ると、例のにやにや笑ひを浮べて、

「どうもお生憎さま！」と<sup>からか</sup>揶揄つた。

喜太次は、はツと顔を上げ、相手が源八だと知ると苦笑した。そして、「やられたよ」と低い聲で言つてから、一寸躊躇してゐたが、やがて源八の耳元によつた。もうそのときには笑ひは全く消えて、沈んだ表情になつて、

「俺ア、皆んなから、腰抜けみたいに思はれてるんでねえかな——と嘯いたのである。

「腰抜け？」

「うむ。おらア、口も碌すつぽきけねえほど、穏和しく思はれてるし、家鴨なんか飼つてゐるから女々しく考げえられてるんでねえかつてことよ。よく申込んでおいたのに、俺が選拔されねえのは、そのためだねえか。——うだ、うだ。どうしても、家鴨の畜生のせいだ！」

かう言つて、口惜しがつたのである。最初の落選でも、そんなに亢奮したのだから、二度目

の今度は、口も利かぬほど残念がり深刻になるのは當然だ、殊によつたら、口惜しまぎれに家鴨をひねり殺すかも知れぬと思はれたのである。勿論、誰にとつても、一刻も早く自分達の入植地を見たい心は同じである。けれど、やや常軌を逸してゐるほど、入植地入りを希望するのが、不思議なほどだつた。踏査隊や先遣隊に加はらなくとも、やがて本隊として入植できるのだから。

「おかしな奴だ！」親しさを込めて源八は苦笑した。

ところが、そればかりではなかつた。源八は、次のことを人から聞いた。――發表のあつたその夜、喜太次は突然のそつと本部に現れた。最初、茫つとしたやうな、又血走つて亢奮してゐるやうにも見える目附で室の中を見廻し、それからおどおどと目を床の上に落とすと、隊長の前に歩いて行つた。

丁度、市川中佐は二三日前の飛行機が落して行つてくれた古新聞を見てゐたときで、自分の方に近寄る人の氣配を感じたが、そのまま、二三分ほど読みつゞけてから、ひよいと目をあげた。すると、二間ほどはなれたところに、こちらを向いて一人の隊員がまだ立つてゐるのであ

る。中佐は、怪訝に思つた。何か自分に用事があつて來た筈なのに、何も言はずに相變らず俯向いてゐる。思はず、中佐はその男　つまり、北口喜太次の頭の天邊から足先までじろりと見上げ見下ろした。

「何んぢや？　何か用か？」

その隊長の聲で、一瞬、その男の全身が震えたやうだつた。けれど、それきりで、答へやうとせず、ただ固くなつて立つてゐる。

「何んぢや？」

もう一度、中佐は大聲に言つた。その聲が終るか終らぬ中、その男の全身が再び戰慄すると共に、涙がぽたぽたと床に落ちるのが燈の光の中に見えた。

この話を聞いた都築源八は、最早や堪りかねて隊長に願ひ出、選拔された自分の權利を北口喜太次に譲つたのだつた。

そのやうにして、目出度く、北口は先遣隊に加はることが出来たが、彼の欲望は、それだけで止らなかつた。紀元節の翌日の夕方、匪賊の逃げ去つた後の入植地永豊鎮に這入り、その翌々日、永豊鎮の南方駝腰子と云ふ砂金産地に立籠る匪賊討伐に移民團からも四十名ほど行つた。これは、滿洲國軍が討伐するのだが、移民團も加勢をした。それに、喜太次は、懇願に懇願を重ねて、加入させて貰つたのである。

丁度、佳木斯の本部から連絡に行つた都築は、流石に、之れには驚いた。喜太次と顔を合せると、何も言はず、まじまじと彼の顔を見た。

喜太次の癖で、人に餘り見られると、ぼつと頬を赤くした。

「どうしたんだね。そんなに、俺の顔見て」

「今まで、おめえの顔を見違えてゐたやうに思ふからよ。やつぱり、目は二つ鼻は一つ……」

「戲談言ふなよ」

「戲談ぢやねえ。——おめえ、又討伐隊に無理に加つたそうぢやねえか。ほんとか」

喜太次は再び赤くなつて微笑した。

「そうか。本當なんだな。」

俺にや、はつきり解らなくなつてきたんだよ。おめえが、先遣

隊に加はりてえ氣持は解るよ。長えこと待ちのぞんだ入植地は誰だつて、一刻も早く見てえもんな。けれどだ、百姓仕事とはちがふ匪賊討伐——命を賭けての討伐に、自分から無理矢理願つてまで行かうて氣持が、俺にやはつきりしねえんだ」

喜太次は眞面目な顔になつた。そんな表情になると、痩せてる細面は狐のやうに見える。低い聲で、

「同じことだよ」

と言つた。

「同じこと？ 同じことつて、どう云ふことだ？」

「同じことつて、同じことよ」と繰返してから「先遣隊に加りたかつたのも、討伐軍に加りたかつたのも、心としちや、同じことだ。——俺ア、先遣隊に加はりたかつたのは、おめえが今言つたこととは違ふ。長いこと空想してゐ入植地を一刻でも早く見てえと思はねえことはねえ。併し、それより、もつと根本は、俺ア、一刻も早く百姓がしてえんだ。先遣隊として、入植地に這入りや、どうせ、種を買ひあつめたり、雪に埋つてゐるけど、土地を大體調査するぐれえの仕事だと思ふけど、それでも、百姓をしてゐるやうな氣がする。だから先遣隊に加りたかつた。今度の匪賊討伐だつて、同じ心持なんだよ。俺達が、身は大陸に来てながら、百姓仕事ができなかつたのは何んだと思ふ。皆、匪賊のためだろう。だからさ、俺達が希望の滿洲農業をやらうと思へば、どうしたつて、眞先に匪賊を全滅させるのが、この際、先決問題ぢやねえか。俺が駝腰子攻撃に行くのも、結局、それなんだ。百姓仕事を一日でも早く落着いて、してえからだ。俺ア、それを他人委せぢや心配でな。この目で見、この腕で、奴等の胸に彈丸を打込んで、百姓仕事を一日も早く楽しみたかつたんだ。こりや、同時に、移民團全體のためにもなるこつたからな」

言ひ終ると、顔を赤めて、にこつと笑つた。相變らず、おとなしい笑ひ方だつたが、いかにも満足してゐる表情だつた。又、満足してゐるばかりでなく、非常に希望に充ちてゐる様子だつた。源八も、こんなに心の底から喜んでゐる喜太次の顔を見るのは初めてで、思はず、嬉しくなつた。彼は聲を立てて笑つた。

源八の笑聲にそそられたのか、北口も聲を合せて笑ひ出した。聲を出して何んとも言へぬほどうれしそうだつた。(このときの姿から、二日後には、彼がこの世の人でないとは、誰が豫想できたらうか。)

「家鴨のせいぢやなかつたな。あいつと別れなくてよかつたぢやねえか。どうだ、元氣かい」  
源八は、まだ笑ひながら言つた。

「何も彼もうまくいつてゐるだ。熊谷大尉(先遣隊の隊長)が、とても可愛い、擦寄つてくるところなぞ、小せえ女子おんなこと同じぢやねえかつてな。その女子は今、本部の隊長室に行つてゐる」  
これにも、北口は満足そうに笑つた。

このときのうれしそうな姿から、彼の直ぐそばに死が近寄つてゐるなぞと誰が豫想できたら

うか。

駝腰子は、この地方では有名な砂金の産地で、匪賊はその財源を抑えて、隣近に暴威を逞しうしてゐるので、相當根強い勢力を持つてゐた。これを突崩し壊滅させぬ限り、開拓地は地雷火の上にあるのと同じである。いつ、襲撃されるか解らぬからである。

攻撃の火蓋は、十五日の拂曉切られた。入植地に這入つてから三日目である。五百に餘る匪賊は死物狂ひだつた。かねてこのことあるを豫期して充分ととのへた防備を以つて對抗した。

山崎砲兵中尉（後の團長）に率ゐられた移民團の一隊は、滿洲國軍との緊密な連絡の下に、迂回して左手から敵を衝かうとした。ところが、途中で敵の伏兵に襲はれた。交戦四十分、敵はたまりかねて退却を始めたが、その際、喜太次は横合からの敵弾によつて倒れたのだつた。風によつて吹きちらされた斑ら雪の上にうつ伏せになつた喜太次の體に走りよつて抱きおこしたのは、奇しくも、木下惣市だつた。

敵弾は胸板を貫いてゐて、それで事切れてゐた。だが、彼が抱きおこしたとき、喜太次は目を微かに開き口を動かそうとしたらしかつた。いや、そのやうに、木下は思つたのかも知れな

い。「うむ？ 何んだ、何んだ？」木下は自分の耳を彼の顔にすりつけるやうにしたが、何も聞える筈はなかつた。

その夜、敵の敗走した丘の中腹で、キャンプ・ファイアが眞黒な夜空をこがした。けれど、それは、キャンプ・ファイアではなくて北口喜太次の死體を茶毘<sup>だび</sup>に附する火だつたのである。村落の滿人の家から貰つてきた薪をつみ、その上に紙で作つた造荒を胸につけた屍を横へ、更に薪を積んで、火をつけた。火は石油にけしかけられて、炎を突き上げ突き上げた。隊員は聲をのんでまわりを取圍んでゐた。

そのときである。長い間、一言も發せず黙りこくつてゐた木下惣市が、突然耐えきれぬもののやうに泣き出した。而も聲をあげて泣き出した。

皆は泣聲に胸をうたれて、その方を見た。それが、あの日頃冷然たる木下だと解ると、再び強い驚きと共に一同は胸を叩かれた。死體の上につけた造花も、彼の作つたものだつたのである。

「北口、おめえは言つてたそうだな」木下は泣聲で口をきり、泣聲で聲がつまつた。一寸して

からつゞけた。「昨日は、嘗つてねえほど、よろこんでたさうだな。この討伐軍に加つたことを。——入植地にも這入つた。これから討伐軍に加つて、一刻も早く匪賊を追ひ拂つて了へばいいよ、待ちのぞんでた百姓ができるつてな。何も彼にもねえ。おめえは百姓がしたかつたんだ。百姓してエばかりに、この討伐軍にも加つたんだ。ところが、やつと敵を追拂つたと思つたときに、おめえは死んぢまやつた。北口！ 北口！ おめえは、馬鹿野郎だ……」

もう、喜太次をいたむ悲しみで、木下の聲は杜切れてしまつた。火は天を焦がして、かつかつと燃え上つてゐる。隊員は誰も彼も頭をたれ、肩をふるわし、せき上げて泣いてゐた。

北口喜太次の戦死は、その夜の中に本部に急報された。このおとなしい男の死は人々を烈しく驚かした。彼等は翌朝になつても、餘りの強い悲しみのために口をきく者がなかつた。ただ例の家鴨だけは、本部の隊長室の窓からさしこむ日光の中を、あちこち、よたよたと動き廻つては、時々首を長くのばしてのんきそうに鳴いてゐた。

けれど、それを相手にせず、

「漢文をやるだけで、時間が一杯だ。他のことに口出しする餘裕がない」

それを皆まで言はせずに、雄三は、

「先生！ 同時代の西歐のことを考へることが、いらぬことでせうか。漢文を習ふ場合——それはいらぬことですか。僕は、さうは思ひません。先生とは、その點、全く對蹠的です」

彼はさう一氣に言ふと、ぐつとそり身になつた。その言葉のきれた一瞬間、全生徒がしんと静まり返つてゐること——つまり彼の發言を一心に支持してゐるのを彼は感じたのであらう。

何か、級の英雄としての矜持の中で、益々亢奮しながら、けれど、態度だけは演説者によくあるやうな落着きぶりを示しながら、

「僕としては、漢文が漢文としてだけ存在するのには反對です。まして、單に字義の解釋に止まるやうな漢文なら、何も先生から教へて戴かなくとも、學校の賣店あたりで賣つてゐる虎の巻を見れば充分です」

「さうだ、さうだ」どこかで、低い聲がした。同時に、賛成を現す全生徒の氣配が、體をうご

なのに、不思議な所で、日本にゐるのとそっくり同じ蝶が、同じやうな戯れ方で舞つてゐるのが不思議に思はれるのだ。

「お待たせしました」齒切れのいゝ鮮かな日本語と一緒に、氣輕に背廣姿で出てきた青年があつた。それが、當の蒙古王博多文である。蒙古と云へば、砂漠と草原と、それから、裾の長い、汚ない蒙古服と自ら行動の鈍くなるやうな大きな蒙古靴と鈍重な蒙古刀。砂漠焼けのした泥色の表情のない顔とガニ股のづつしり重そうな足の運び。それらが思ひ出されてくる。ところが、今、目の前に立つてゐるのは、日本どころでなく、歐米あたりで磨いてきたやうな垢抜けした物腰である、そして文化的な氣品があり一種の抑揚のある貴公子なのである。色白の丸顔に、洗練された微笑をうかべてゐる。その微笑は、王子として育つたための人に恐れず物怖じをしないせいもあるがそれと共に、文化と品のある富裕の中で磨かれたものに相違なかつた。而も、急速に洗練しやうともがいた成上り者の臭みのないのは、矢張り育ちだと云ふ感じである。外吉は、自分の想像と違ひすぎたために驚いて立上つた。そして、どもりながら早口に挨拶にもならぬ挨拶の言葉を喋つた。

「仲々、ここは解り難かつたでせう」博多文は微笑をついて、椅子に腰を下ろしてゐた。

「ええ」と外吉も、微笑になつた。大どかで洗練された相手の物腰によつて、いつの間にか微笑で對することのできるやうな落ち着きと和かさを彼は取戻してゐた。「洋車の俥夫がよく解らない男でして、間違へてばかりゐるんです。紫禁城の前など、三度も通りました。丁度、女學生が歩いてまして、その人に教へて貰つたのです」そこで、外吉はふつくらした體付と顔の優しさうなその娘のことを思ひ出した。彼は博多文にその容貌を述べてから、

「御存知でせうか」と顔を見た。彼女に會つてるときはそこまで思はなかつたが、この邸の外観が單なる通行人にはそれと解らぬほどひそやかなので、あのやうに詳しく知つてゐるのは、何か關係があるのではないかと思つたからである。

博多文は、微笑から一寸不審の表情になつて顔や姿や僻などを問返してきた。

「どんな娘でしたつて？」

けれど、結局、博多文には解らなかつた。

「今度、こちらには、御視察ですか」博多文は話頭を轉換して、愛想よく訊ねた。

「そのことですが」外吉は、武里滿立に紹介しやうかと言はれて、急にうれしくなつた原因もそこにあるので、自分の考をまとめるために、一寸、間を置いてから「實は、蒙古と蒙古人を少し調べるために來たのです」

「どうなさるのです」

「前から蒙古について興味を持つてゐたからです。それに、はつきりしたお答は未だできませんが、何らかの形で蒙古と云ふものを日本人に知らせたいからです」

「ぢや、何かお書きになるんですな。小説にでも」

彼は武里滿立の紹介で、大崎外吉が日本の作家の一人だと云ふことを知つてゐた。併し外吉はそれには、何も答へずに、

「蒙古人は、嘗つて、前古未曾有の大國家を作りましたね。亞細亞と歐羅巴に跨がつた強大な國を——」

「チンギス・ハン！」と低い聲で博多文は喚いた。

「そうです。チンギス・ハンがあればどの國家を作つたのに、その同じ蒙古人が現在のやうに

世界の表面から埋れて、あるか無きかのやうになつてると云ふのが不思議です。僕は立上る蒙古人と云ふものを考へてゐるんですが。嘗つての強大な民族の血が、死んで了つてゐるわけはない。機會さへあれば、生々と燃上るんではないかと思ふんですが。あなたは、どんな風に考へてゐられるんです」外吉は、新聞記者が相手の氣持を自分の求めてゐる方向に誘導するやうな言ひ方をした。博多文が幼い頃、考古學者のT博士か誰かに日本に伴はれて、そこで成長をし、W大學を出たと云ふことも、漠然と武里から聞いてゐた。けれど、今の大學から受ける素養を外吉は高く考へることができなかつた。大學を出ても彼等は殆んど何も知らないし、何も出来ない。まして、蒙古人としての特別の取扱ひだから、卒業はほんの形式的なものに過ぎないだらう。成程、洗練された紳士の風貌を持ちどこか知識人らしい締つた表情を具へてはゐるが、案外にそう云ふものが知識や素養とは別個の、例へば氏や素性の高貴さがその原因をなしてゐる場合がある。外吉が誘導的な方法を用ひたのも、それらが信用できないからであつた。恐らくこの方法を用ひれば、彼は民族的な一種の亢奮にかられて話し出すだらうと思つたのだ。チンギス・ハン！ と低い聲で喚いたその聲の中に、すでに民族的な感情の高まりがほの見えて

ゐるではないか。

ところが、博多文は微笑を急に消すと、「むづかしいことです」と僅か一語で黙つた。

これは、全く外吉には思ひがけなかつた。自分が良い氣になつて相手を見締つてゐた虚をつかれたやうな氣もした。

「どうしてです。僕には解りませんが」外吉は自分の言つた言葉を必死で守らうとしてせき込んで言返した。

「絶望だとは思つてゐません。併し、仲々容易くはゆかぬと思ふのです」靜かに落着いた聲である。

その聲には、そのときの拍子で、言出したのではなく、深く内省のこもつたものが秘められてゐた。外吉は内心驚いた。その民族の人であり、而も、今、世界の視聽の照射をあてられて、いい氣持になつてゐる筈であるのに、このやうな内省をしてゐるからである。そして、この男は、その容貌や物腰にそれとなく現れてゐる知識的な文化的な素養を本當に内藏してゐると考へねばならぬことに思ひ當つた。

「喇嘛教の問題や何か悪い病氣の問題があると云ふのですか」流石に、梅毒とは言へず、悪い病氣ときり言へない。蒙古人は男が生れると長男以外はすべて喇嘛教の僧侶にする。僧は非常な數であるが、生産活動の中心である男は少ないために、民族の力は日に日に弱まつてきたし又、人口も年々に遞減する一方なのだ。彼等は一般に蒙昧であるだけに、宗教に對して狂信的であり、この偏奇な宗教的戒律は民族を固くしばつて、徐々に衰亡へと引きづり込んで行つてゐる。又、花柳病の蔓延がはげしく、而もそれに對する醫療施設がない。これは單なる噂としてきり外吉も考へることはできないが、蒙地に這入ると、凡ゆるものに花柳病の黴菌が附着してゐるので大變危険だと云ふ。併し、噂にしてもそんな噂が出るほど烈しいらしいのだ。

「悪い病氣つて、花柳病でせう。ひどいことを言はれてるらしいが、その點は僕は肯けない。けれど」博多文は前にも言つたやうに、日本人と殆んど變らないほど、日本語がうまい。「あなたの言はれた喇嘛の問題は大變なものです。喇嘛があつて蒙古人があり、蒙古人があつて喇嘛があると言つたほどの切つても切れぬ關係です。彼等から、これを引離せば死んで了ふでせう。あなたは蒙地の喇嘛廟を見ましたか。蒙古人は粗末な包ベヤの生活をしてるのに、喇嘛のため

にはすべての財産を捧げてあんな立派な廟を造るんですからね。熱河の喇嘛廟は御覽になつたでせう。よく御存知でせうが、清朝が莫大な金を投じてまであんな壯大な廟を造つたのも、蒙古人を手馴づけるには喇嘛を利用する以外には方法がないことをよく知つてたからです。――併し、蒙古には、まだ問題がありますよ。蒙古の封建制です。各地に夫々王が居り、その王と臣との關係です」

成程、と外吉は思つた。蒙古には多くの王のあることは百も承知してゐた。従つてその人民がある筈である。併し封建制などと云ふ言葉で呼ばれるていのものとは考へてみないでゐた。徳川期の封建制が脆くも崩れ落ちて、自分らにとつては過去の夢のやうにきり思つてゐないので、この現代にそれほど君臣間の分際の烈しい封建制があるとは、想像できなかつたためである。又、封建制の強固さも、ある程度の道德文化を持つたところに起り得るが、蒙昧極まる蒙古人の間に、それほどものがあるとは考へられなかつたためでもある。

外吉は暫らく考へてゐた。邸のどこからか、立琴でも弾くやうな哀愁を帯びた音がつたはつてきた。

「青年たちはどうしてゐるんです」外吉は吐き出すやうに、少々亢奮した聲で言つた。

「青年？」

「青年です。私が今度來たのも、その青年たちに期待してゐたのです。喇嘛教の重い鎖も氣候風土の困難も大體知つてゐました。けれど、青年が何かをやるに相違ない。立上る蒙古の私の夢はそこに託されてゐるのです」外吉は封建制の桎梏を打破つた明治維新の青年志士たちのことを頭にうかべて、亢奮したのだ。

「そう云ふ意味ですか」博多文は、相變らず落着いてゐた。そして、ゆつくり彼の言葉を噛みしめるやうにして肯いた。外吉よりも年の若い筈のこの蒙古王のさう云ふ姿にはひどく老成してゐるところが見える。「大崎さん、私もそれを期待してゐるのです。けれど、事實はさうではない。喇嘛に對する一種迷信的な信仰の上に、封建制の分際觀念がまるで呪文のやうに喰込んでゐるのです」

「けれど、あなたのやうな大學を出た方も今では相當ゐると聞いてますが……」

「さう云ふ學問をした者が先立ちになつて陋習を破れと言ふのでせう。成程、大學を出た者も

幾人もゐるやうです。又、勉強もし努力もしてゐるやうです。けれど、その僅かな者が動いたとて、どうにもならんのです。大海を舟の上から棒で叩いてゐるみたいなもので、大海自身には何んの痛痒もないことです。一切の意味で、まだ蒙古はその時期に至つてゐないと言へるでせう」

「ぢや、どうすると言ふのです」外吉は期待をして遙々と來ただけに一種の憤懣で焦立つた。

「それは難しいことです。一言で言へません。ただ、かう云ふことが言へませう。今まであつたもの——つまり、喇嘛教や封建制を利用することによつて、民族を良い方向に高めることです。もう一つは、日本のやうな友邦民族の助けによつて良くなることです」

外吉は暫らく黙つてゐた。黙つて考へてゐたことを、一寸緊張した表情をあげて思ひ切つて言つた。

「あなたは、日本を信じてゐるのですか」

「信じてます」その聲には曇りがなかつた。

「あなたは、假にも滿洲國の官吏だから、そんなことを言ふのぢやありませんか」

「官吏だからつて捉はれてゐません。官吏なぞは、止さうと思へば、いつでも止します。良いことと思つたことは、やるだけなのです。この六月に、祖先以來受繼いできた人民と土地を滿洲國家に捧げました。滿洲國內の全部の蒙古王が行つたのですが私はそれを主唱したのです」自分の所有の土地人民、それを、相手は國家とは云へ、言はば他人に與へることが惜しくはないのか、それが外吉には解<sup>け</sup>せなかつた。

「あなたは惜しくないのですか」

「もう、さう云ふ時代になつてゐるのです。蒙古も、そこまでは來てるのです」きつぱりさう言つたきりだつた。そして、「蒙古が獨立するのを、どんな風に考へられるか知れないが、仲々大變なのですよ。蒙古人と言つても、同じ滿洲にも我々の熱河蒙古あり、北に興安蒙古あり徳王たちの内蒙古あり、ソヴェート領の外蒙古ありです」と一寸淋しさうに附足した。

丁度そのとき、向ふの廊下を召使らしい年老つた女をつれて若い蒙古服の婦人が通つて行つた。顔ははつきり解らぬが、首からつた蒙古の首飾だけは見えた。外吉は先刻聞えた立琴のやうな音楽を思ひ出した。

「さつき、弾いてらしたのは奥様ですか」

「ああ、そうです。蒙古琴を御存知ですか。あれですよ。あの人が教へてくれました。妻も永く私と一緒に東京にゐたものですから。あの人は、音楽は仲々うまいのですよ。手風琴はアルペール・プレヂヤンに負けをとりません」と笑つた。

あの人と云ふのは、武里満立のことである。それは話の前後から直ぐと解るのだ。けれど、アルペール・プレヂヤンとは何んのことか、急に解りかねたが、「ああ、巴里の屋根の下か」と云ふ風に解つた。それにしても、この北京で、而も蒙古王の書院の中で「巴里の屋根の下」が出るのは不思議な感じがした。

大崎外吉はそれから半月ほど蒙疆地方に旅をして戻つたとき、再び博多を訪ねた。そして、彼から例の武里満立が自動車にはねとばされて病院に入院してゐることを知らされた。筆者は他の小説で、大崎外吉がその病院に見舞に行つたところが、武里は話の途中で急に亢奮した表情になつてベットから上半身を起上がりかけ、自分が外吉に嘘を言つてたことを許してくれと泣いて詫びたことを書いた。

「僕は蒙古人なんです。日本人を装つて、あなたを今までだましてゐました」さう言つて、本當に涙を流し、頬を苦しげにひきつらしたものである。

又、その小説に、外吉が告白を聞いて、今の今まで彼が自分をだまし了せてゐたことに驚くと云ふより、殆んど疑はないでゐたし、氣が付きもしなかつた自分ののんきに驚いたことも書いた。

その通りであつた。外吉は本當に彼が日本人だと云ふことを疑つてみやうともしなかつた。大體、武里滿里が何故彼をだます氣になつたのか。それには深い理由のあることではないらしい。自分が日本人でありたいと云ふ希望が、そのやうに装はさしたと云ふに過ぎないものやうである。木曾はどんな土地だとか、木曾の女は一般に美しいのか、なぞと彼が聞きたがつたことを前述したが、それは彼の病床の枕元の横机の上の日本人の娘の寫眞と關係のあることのやうに外吉には思へた。つまり、大崎外吉の判断によれば、この日本の少女と結婚をしたい心願が彼を日本人だと装はせ日本人だと嘘をつかせるやうになつたのであらう。彼は前述したやうに容貌も言葉も一點日本人として疑はせるやうなところがなかつたから、恐らく、最初こそ

の少女に日本人として近づいたのではなからうか。併し、愛情が強くなれば、そんな嘘をついてゐられなくなるからその後どうなつたかは知る限りではないが、その日本人を装つた習癖がいつか外吉に對して現れたのではないだらうか。

では、何故、日本人として装ひ通さないで、泣きながら告白したのだらう。外吉は病院の歸途の洋車の上で、それを考へた。彼が承徳の驛で最初彼を見かけたときのことを思ひ出した。

丁度、滿洲國のえらい人を送りにきた役人が大勢ゐたが、彼等は皆、武里滿里を愛してると云ふ風だつた。彼の方では特別な意志表示もしないのに、何かしら愛情のこもつた表情や言葉を投げかけて行つた。彼の上役らしい佛頂面のづんぐりした日系の官吏の如きは歩いてきて彼を座席に見つけると、「北京に出張ださうだな」と彼の方から聲をかけた。けれど、武里は「ええ」と極めて簡単に言つて微笑したきりだつたが、その一寸した微笑で佛頂面の上役は忽ち氣嫌をよくして、

「北京に可愛がられすぎて體をこわすなよ」と笑談を言つて笑ひ出したほどだつた。

彼がこんな風に皆に可愛がられてゐるのは、たしかに良いところがあるからだ。外吉の見た

ところでも、純粹に見え、その純粹さが人々に愛せられる所以なのだらう。彼が泣きながら告白したと云ふのもこの純粹さのなせし業ではなかつたらうか、病床に横つて、じつと愛人のことを考へてゐる中に、自分の氣持が益々澄みきつて行き、微かな偽りすら恐れるやうになつたせいではないだらうか。

すべての日本人が、彼のやうな形で告白するとは限らない。又、武里滿里も外吉が推量したやうな心理的經過を通つたものかどうか解らない。併し、彼の全體の動きを見てゐると、何か日本人と共通してゐるものを感じる。外人や支那人と附合ふと、時々どうもしつくりせず、又一寸したことからひどい誤解を引起すことがある。ところが、武里滿里には、日本人のそのままの氣持をもつて行つて解つて貰えるし、先方のそのままの氣持をもつてきて解るやうなところがあると言ふのである。彼ばかりではない、博多文にもそれを漠然と感じてゐたことを思ひ出す。彼等兩人だけではなく、日本人と同じウラルアルタイ系民族の蒙古人には同じ血を引いてる者としての共通性があるのではないかと云ふ風に、外吉は考へてみた。若し、そんな考が許されるとすれば、武里滿里の容貌や言葉に日本人としての不自然さを少しも感じなかつた

のも、體の底に横つてゐる共通性がさうさせるのではないだらうか。少くとも、日本語を日本人らしく握みとる性能を具へてゐるのであらう。

大崎外吉は北滿や蒙疆を歩き廻つて、幾人かの蒙古人に會つた。まるで乞食か癩病患者のやうな形相をした汚ない蒙古人を見かけた。そして、一見、日本人とは似ても似つかぬものを感じた。けれど、仔細に見てゐる中に、日本人の骨格や眉目を彼等の中に見出すのだ。かの徳王にも會つたが、彼も支那人と云ふより、矢張り日本人に似てゐる。又、薄汚れた土民の中からは、日本の百姓親爺を見出した。又、逆に、日本人を蒙古人と間違へたこともある。滿洲の北の町を歩いてゐるとき、道で立話をしてゐる兩人の男を蒙古人と睨んで近より、その側を通りすぎる途端に、兩人の會話が日本語であることに驚かされたことがある。

外吉は自分が武里滿里を日本人と思ひ込んでゐたことは少しも無理がない。

彼は、二三日經つて博多文に會つたとき、自分の想像した武里ラブアフミアの戀愛事件を話した。すると

蒙古王は一寸緊張した表情になつて、彼の顔をさぐるやうに見てから、

「どうして知りましたか」と言つた。それから落着いた彼に似げなく涙ぐんで「それは、本當です。あの男は命を縮めるほど戀焦がれてゐるのですよ」

「どの程度に進んでゐるのでせう」

「それは、解りません。けれど、仲々困難な問題です」と三度び、仲々困難と云ふ言葉を使つた。併し、蒙古人問題について使つたときより、外吉にはその言葉が一番感情的にびつたり解り、解るだけに辛い氣がした。

「困難な問題ですけど」と王はつゞけた。「あの男のために、私の妻の友達をして北京にそのお嬢さんと呼ばふかと思つてゐるんですよ。暇をみて、奉天まで行かうと考へてゐるところです」

「娘さんは奉天にゐるのですか」

「ええ、さうです」それから聲をひそめるやうに低くして、「あの人の眞剣な問題なのですから、輕々しくあの人にこのことを話さないで下さい。彼は胸の中にじつと藏つて苦しんでゐたのですから」

蒙古王をこんな氣持にさせるほどだから、彼がどんなに眞剣だかと云ふことが、外吉には解

る氣がした。又、彼は自分一人胸の中に秘めて置きたいが、自づと烈しく外に現れるのは、いかにも蒙古人——いや、日本人と同じ血液の蒙古人らしいと思つた。喜怒哀樂の感情の烈しいことは、矢張り支那人とはちがつてゐるのだ。

外吉は、その後、病院に彼を見舞つたとき、蒙古王の言葉を重んじて、成可く戀愛事件に觸れぬやうにしたが、思はずひよいとこんな言葉が出た。

「奉天の街は好きですが」外吉は言つて了つてから、心の中で周章てた。

彼はひどく驚いたやうな表情をして、暫らく、外吉の顔をじつと見た。それから、その緊張した表情がゆるんで行くと、無言で目を白い敷布の上におとしたが、その目には涙が一杯にじみ出てゐたやうだつた。

大崎外吉が北京を立去る頃には、武里滿里はまだ病院にゐたけれど、もう四五日で退院と云ふほど良い経過を示してゐた。

内地に戻つてからも、時々彼の問題はどうなつたかと考へた。ところが半年ほど後、人傳て

に彼が死んだことを聞いた。何んの病氣かはつきりしないが、死んだことは確かだつた。外吉は彼と共に過した幾日かの面影を回想して、ひどく可哀そうになつた。それと共に、ああ、これでよかつたと、ほつとした。恐らく失戀をせずに死んで行つただらうと考へたからである。武里満立は、どこかでアルペール・ブレヂヤンに負らぬ手風琴をかなでてゐるかも知れぬとも思つた。

手  
風  
琴

崇文門大街の東單牌樓から、狹隘な胡同を奥深く這入つたところに、一劃の邸町がある。土塀や漆喰の塀でめぐらした邸が、まるで人氣がないやうに静まり返つてゐる。その中に一軒だけぽつんと旅館がある。一目で場違ひと感じられるし、何か繼子のやうでもある。大崎外吉も最初見たときにはそれを感じた。ただ彼の場合は、北京の雰圍氣に壓倒され一種の魔力に引廻されて茫つとしてゐるので、その直感がそれ以上にのびないで搔消されて了つた。又、一つには、「葵旅館」と云ふいかにも古めかしい日本人經營を思はせる看板が入口のところと二階の出窓のところに出てゐる以外には、建築の様式も材料も、さしてこの邸町の空氣と違ふところはなかつたから、それ以上考へなかつたのであらう。

「支那宿を改良したんだな」外吉は、そんなことを心の中で思つただけだつた。

けれど、支那宿を改良したなぞとは、少々考へてみれば、大間違ひであることに氣付く筈。それが氣付かずに平然としてゐるのは、北京の惑<sup>まど</sup>はしのせいであらう。

やがて、彼にも氣のつくときがきた。あてがはれた二階の室は八疊の日本間に略々同じぐらひの控の間がついてゐて、どことなく豪華な感じをうける室であるが、そこにぽつんと坐つてゐる中にいつか無精たらしく窓に顎をのせて隣の邸の中を見下ろしたり眺め廻したりした。この宿に泊り込んでから幾日目であつたらうか。北京に着いたばかりには汽車疲れがある筈なのに、妙に亢奮してゐるため、反つて體がしやんとしてゐたが、その日あたりは次第に疲れが自分の體の中に意識され始めたそんな朝であつた。外吉はその邸の令嬢らしい十七八の體のすんなりした美しい娘を見かけた。彼女は體になごやかに寄添ふてゐる綺麗な支那服を着てゐた。外出するところらしく、手には白っぽい高價そうなハンドバックを下げてゐる。奥の母屋の方から出てきて前庭の石疊の上をコツコツと軽く小さい靴の音を立てて門の方に歩いて行つた。表門の一つ手前の小門のところには、固い椅子にぐつたり寄りかかつて昨夜の夢のつゞきでも見てゐたらしいお抱の俵夫がびつくり起上つて彼女の後からついて行つた。けれど、それから

先どうなつたかと云ふことは、日除けの簾にさへぎられて見えない。

その簾と云ふのは、外吉の旅館のではなく、その邸の庭全部を覆つてゐる大きな仕掛けである。母屋の方は、やはり簾のために見えないが、これは勿論、石造ではなく支那式な建築に相違ない。それ以外はすべて石で造られてゐた。母屋までは門が二つあるが、その門につらなつてゐる邸内の塀も庭も隅から隅まで石で疊みこまれてゐる。その上に、塀を利用して大がかりな足場がくまれ、開閉自在な簾が覆つてゐるのである。恐らく、この眞夏の眞晝間でも庭にテールを持ち出して茶を喫することができ、朝と夕の日光のほしいときには、太い麻縄を引いて簾をあけるのであらう。

大崎外吉は、令嬢が現れたとき、ある驚きを受けた。と云ふのは、塀も石、庭全部も石、けれど、西洋風なスツキリしたものではなく、風雨にさらされ黄塵に吹かれた廢墟と云つた感じが深い邸である。勿論、塵一本落ちてゐないほど、掃除が行届いてゐながら、而も、そんなうら淋しさ古めかしさ、東洋でのみ見うけられる古めかしさがある。外吉は顎を窓わくにのせかけて見下ろしてゐるとき、大きな邸だ豪家らしいとぼんやり感じてゐないことはなかつたが何

か北陵の石象でも見てくるほどの氣持きりなかつた。そこに、思ひがけず、新しい世界の空氣を吸つてゐるやうなピチピチした、而も仲々美しい令嬢が現れたのだから、驚きが一層烈しかつたのだ。たしかに彼女は支那服を着、支那の靴をはいてゐるのだが、その支那の装ひが昔風の因循な感じでなく、スカートの短かい洋装のもつ生々したものをにじみ出さしてゐる。彼女が歩く度に、石疊の上にコツコツと云ふ靜かな靴音が聞えたと云ふのも、支那靴であればそんな筈はないので、外吉の錯覺であり、錯覺を起こさせるやうなものが、令嬢の生々した姿の中にあつた。さう言つて了ふと、この令嬢から、ガサツな西洋かぶれの少女を連想する恐れがあるが、實は、どこまでも、奥床しい家庭の匂ひを全身につけてゐる。外吉は中山公園の前の榆の並木道を朝晩颯爽と自轉車を走らしてゐる女學生の姿を本當に生々と美しく感じたが、その令嬢の奥床しさの中に、この生々した女學生時代を通過してきてゐるものをはつきり認めることができるのだつた。

「美しいなア。こんなところに、支那の若い新しい時代が出てゐるんだ」外吉はいつの間にか、窓わくにのせてゐた顎を引いて、一種の緊張に捉はれてゐた。

人間の神経は一つが甦ると、次々と新しくなるものである。令嬢の出現に驚いた外吉の神経は、隣家に對するぼんやりしてゐた氣持をはつきりとさせた。彼は石で疊まれた屋敷を見直した。庭の小門の傍には俣夫か下男らしい男が供待ちしてゐたことを新しく考へてみた。そして相當豪家にちがひないと今になつて氣のつく思ひだつた。つづいて支那の上流に近いこの一劃の邸町の建物のことや、その建物の中に、まるで死のやうにしんと靜まり返つてゐながら、實は先刻の令嬢のやうな若く生々した女なぞが住んでゐることを思つたり、やがて、自分の今泊つてゐる旅宿に思ひ至つた。

この旅舎の中庭も形のととのつた一尺四方ほどの石でひきつめられてゐる。廣さも、そこで少女たちの持つてゐる美しい布の鞠をころばして戯れることができるほどだし、又、中央には今や夏の日光の中で爛漫と咲亂れてる花園があつた。植物に殆んど知識のない外吉には何んの花か一つ一つ言ふことはできなかつたが、カンナとかダリヤとか日向葵とかの西洋の派手な明るい花が黄に紫に赤に咲いてゐた。建物はこの庭の前方と後方に擴がつてゐて、後方の建物は石の階段を下りて行くやうになつてゐるが、それは建て方の一種の面白味を出すために、さう

したのに違ひない。全體を通して、この旅舎の建物は實用的ではなく、何か趣の深い金の相當かけた普請に違ひない。一寸見には豪華に作つてあつても、一皮めくると、ひどいものだと思ふ風な宿屋の建物でないことは確かだつた。

「こりや、仲々、いい建築なのだ」外吉ははつきり解り出した。彼は立上つて、ひよろひよると扉ドのそばまで行つて、そこから見える中庭の方に首をさしのべる恰好をした。「良い支那建築なのにひどく改悪したものだ」と無理に日本間に作りかへたこの室を見廻したりもした。

けれど彼は、この家が元は立派な邸だつたのだとはまだ氣がつかなかつた。

その翌日であつたか、又一つ先の翌日であつたか、外吉はここを紹介してくれたホテルに行つて、番頭と話してゐる中に、この家が元は支那の新聞社であつたと云ふことを知つた。

「新聞社？ あの家がね。こりや思ひがけない」外吉は目の廻るやうに忙しく、そして、社會の眼であり耳である新聞社と雅かな鞠でも轉ばして遊べさうな中庭の様子を結びつけることはできなかつた。

「その前は、お邸ですよ」眼鏡をかけた番頭は、自分の消息に詳しいことを誇らしげに、そし

て、その誇りをゆつくり噛みしめるやうな落着いた口調で言つた。

「フム。お邸。そりや、うなづけるな」彼は前から、さう感じてゐたかのやうに、言つた。たしかに、潜在的には感じてゐたのだ。番頭から言はれると同時に、潜在的なものが、上に急速に浮び上つてきて、前から可成りはつきりそう感じてゐたかのやうな氣持になつたのである。

けれど、それまでの話なら、何んと云ふこともない。ところが、その邸は、今は滿洲國內に這入つてゐる熱河省の××右旗の王、つまり蒙古の王である博多文の持物であつたと云ふのである。詳しく言へば、清朝時代蒙藏總裁として鳴らした父の持物であつたのを、博多文の代になつてから、一族の者に貸してゐた、それを新聞社に賣つたものらしい。

「可笑しなことがあるもんだな」外吉は感に堪えたやうに小聲で叫んだ。

「博多文を知つてゐるんですか、お客さんは」番頭は自分專賣の權利を侵害されたやうな表情をした。

「昨日、會つてきたばかりだ。若し、知つてたら、そんなことも話せたのに。いや、話さなくとも、それを知つてゐて、相對してるのは又別の氣持だつたらうに」

番頭は外吉が蒙古の王様と知合だと云ふので、驚いたらしかった。

大崎外吉が博多文と知合つたのは、全く偶然のことである。その年は、滿洲から北支にかけ、てひどい洪水だつた。熱河にゐた外吉は、大廻りに錦縣山海關を経て一先づ鐵道の通じた沽塘まで來たのだが、その途中の汽車の中で一人の滿洲國官吏と知合ひになり、同じ塘沽の宿屋に泊つて、天津まで行く便船を待つた。その男が、自分は博多文と親しい、會つてみぬかと言つて、北京に着くと、紹介狀を書いてくれたのである。

大體、今度の旅行の目的の一つは、蒙古と蒙古人について研究とまでは行かなくても、自分の目で見、自分の耳で聞くためであつた。それだけに、熱河蒙古の王と知合になることは思ひがけない幸である。外吉はよろこんだ。

實は、その滿洲國官吏は、後になつて解つたことだが、蒙古人であつた。ところが、大崎外吉は迂濶なことに、日本人だと思ひ込んでゐた。武里滿里と云ふのだが、その姓名を少し疑つてみれば、不審に思へてくる筈だが、「妙な名字で読み難いです。タケザト。さう讀むんです」と名刺と一緒に説明されると、そのまま信じて了つた外吉だつた。もう名の方の「滿立」

を何んと讀むかなぞと考へても見なかつた。けれど、この男には日本人以外のものを感じさせるやうなところは、一寸無かつた。顔は細面の稍々痩せた顔で、才氣走つた日本の青年になぞよく見かける容貌だつたし、その言葉も、標準語をうまく使ひこなしてゐた。使ひこなすと云ふより、すつかり身についてゐた。よく、語尾でぼろが出るものだが、それが東京人のやうな巧みさを持つてゐた。どちらかと言へば無口の方だが、仲々底に秘めた情熱家らしく、時々目を輝かし、聲にある感情を含ましたが、さう云ふ場合でも、ぼろを出すことがなかつた。

「木曾つて、どんな所です？ 自然が美しいところですか。美しい女が多いんですか」つゞけざま、にそんなことを外吉に訊ねたことがあつた。その聲の含みから、彼が木曾の少女にでも心を惹かれてゐるらしいことが薄々解つたが、言葉は正しい日本語だし、日本人らしい情熱的な口調だつた。その情熱的な感じがいかにも日本人らしかつたし、又、時々見せる才氣の閃めきが、日本の才走つた青年の才氣をつくりであつた。恐らく、外吉などは企ても及ばない才氣であつて、そこから、あの蒙昧と云ふ先入觀念のする蒙古人なぞ想像もできはしなかつた。或ひは、博多文との會見のときに、彼のことが話に出、その姓名なぞが呼ばれでもしたら、恐く

解つたことだらうが、偶然にも、一度も出なかつた。彼のことについては、すでに解りきつてゐるものとして、話の埒外にあつたし、又、外吉の蒙古王に訊きたいことは澤山あつたので、道草を食ふ餘裕がなかつた。一二度、彼のことが何かの拍子に出たやうであつたが、「あの人は」と云ふ風な言葉で済まされた。

外吉が博多文を訪ねたのは、曇り日の朝早くだつた。まだ八時にはなつてゐなかつた。そんな早く行つたのは、彼が外出して了ふのを恐れたからである。瘦せこけてまるで眠つてでもゐるやうなぼんやりした老人の俤夫なので、洋車は仲々思ふやうに走らなかつた。塵のしつとり落着いた夏の北京の朝を洋車で走することは、たしかに快いものに相違ないが、流石にその老俤夫の速度には焦々した。そればかりか、道を間違へて、紫禁城の高い古めかしい城門の前を二度通つたりした。氣の弱い大崎外吉も流石に腹を立てて思はず日本語で怒鳴つたり、堀ぞひに歩いてる専門學校の女學生らしい支那の娘に洋車の上から呼びかけたりした。勿論、支那語を知らぬ彼は、「一寸、お訊きします！ お訊きします！」と日本語で叫んで懷中から素早く手帳を取出すと、目的の住所を書いてみせた筆談である。その娘は支那の姑娘には珍しく、一

寸日本の娘のやうにふつくらしした體をしてゐて、顔も嘗つて彼の學生時代の女友達の誰かを思はせるやうな白色のふつくらしした優しいものだつた。心も顔や體付のやうに優しいらしく、俤上から聲をかけたりする亂暴な日本人に怒りもせず、丁寧に老俤夫にその道を地面に圖を書いて教へた。大崎外吉は、屈んでる彼女の上から、彼女の白くて可愛らしい頸筋と、手にもつてゐる薄桃色の花を見のがしはしなかつた。

やつと、目的の邸を見つけて、老俤夫は梶棒を下ろすと、「ほオー！」と云ふ風な低い溜息をするのが外吉に聞こえた。

邸の外観は彼が想像してゐたものとはちがつてゐた。蒙古の勢力のある王であり、その父は蒙古から西藏一帯の代表者であつたのだから、さぞかし、輪奐の美をつくしてゐるだらうと思つてゐた。ところが、古ぼけた丸い瓦をのせた門が默然と立つてゐた。その附近一帯は彼の旅宿の葵館のある邸町と較べると、はるかに小さな家々が、稍々つぶれたやうに群がり合つてゐた。皇城の裏に當る場所柄から言つて貧民窟では決してないが、餘り豊かでない人々の街である。さう云ふ中に、埋れるやうに、或ひは人目からかくれるやうに、そつとひそんでゐるやう

な感じである。本邸は熱河省にあり、この邸は北京別邸には違ひないが、あれほどの人の別邸にはふさはしくない。謙虚と言へば謙虚である。何か先代の心構へが、こもつてゐるのであらう。大崎外吉は、はつきり掴めぬままに、そんなことを考へた。

左の耳門の扉をたたくと、そこから鈍い表情だが岩乗な體軀の門番が顔を出した。その後にも、二人ほどむつつり黙りこくつてそつぽを向いてゐた。そつぽを向いてるだけに、一層こちらに注意をしてゐる感じがあり、又、ひどく強そうに思へる。

外吉はその中の一人に導かれて行つた。邸の中は、迂餘曲折してゐるには驚いた。子供の頃入口から出口にうまく通る迷宮圖の遊びがあつたが、それを思ひ出した。四五間歩くと壁が立塞つてゐる。そこを左に折れて小門を這入ると途端に前方に壁があり、右に歩いて行くと隣家の塀に突當つたり建物の廊下の下に出たりと云ふ風である。けれど、その邸の内部の構造に馴れぬから、何か迷宮めいたものを感じたので、通繞して了へば何んのことはないかも知れぬ。それにしても、何故、こんな邸の布置を必要としたのかと外吉は考へた。

奥の書院の一室まで導かれた。これが母屋であるらしいが、この一棟は流石にどことなく豪

華な感じがあつた。屋根の瓦の色も室の内部の柱の色も窓ワクの木目も時代的な古さの中に沈み込んでゐるが、靜かな輝きがひそんでゐた。蒙古人ではあるが、建物はすべて支那式の様式と色彩とをもつた建築で、我々が繪本三國志とか「蘇州美人圖」と名づけた日本の支那料理屋に下つてゐるポスター代りの繪で馴染んでゐる建物なのだ。

外吉は螺鈿の雅かな卓子を前にし朱塗りの大きな椅子に腰かけて、待つてゐながら、自分が突然その繪の中の人物になつたやうな氣がして、腰かけてる尻がこそばゆかつた。

「それにしても、どんな男なのだらう。滿洲國官吏と云ふ名稱は持つてゐても、その出身に對して與へた單なる資格にすぎない。蒙古の王様。矢張り、この建物や家具が暗示してゐるやうな男かも知れない」

庭には緑の草木にまじつて赤や紫や黄の草花が一ト塊り咲いてゐる。後の崩れかかりさうな泥塀を背景にして、その花の色が妙に鮮かに見える。その上に黄色い蝶が二匹互ひにからまり合ふやうに舞上つたり舞下つたりしてゐる。外吉は不思議な氣持でそれを見た。北京に蝶がゐることに何んの不思議はない、蒙古王の邸の中に蝶がゐることも不思議はない筈である。それ